
清川家の日常

planet

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

清川家の日常

【Nコード】

N1674L

【作者名】

planet

【あらすじ】

バイト大忙しの長女、美代に、家事全般は任せろ！！ の長男、秀明に、勉強なら得意な次女、智花、あとその他愉快的仲間たちが繰り広げる日常生活。ちょっと覗いていつてはいかがですか？

お兄ちゃんがいないと私たち何もできないような…… b y 智花（前書き）

キャラ説明。

長女……美代、21歳、大学生、一人称「あたし」

長男……秀明、16歳、高校生
一人称「俺」

次女……智花、14歳、中学生
一人称「私」

これを覚えておくと話が分かりやすいです。

とりあえず、地の文の一人称が「あたし」だったら美代視点、「俺」だったら秀明視点、「私」だったら智花視点ということ。これを二十歳まで覚えていると……、的な呪いは多分かかっていないので安心して覚えてください。

では、始まります。

お兄ちゃんがいないと私たち何もできないような…… b y 智花

「あー、智花？」

電話の相手はお兄ちゃんだった。

「お兄ちゃん？ どうしたの？」

家に帰り、着替えが終わり、一息ついた時、携帯が鳴った。

「ワリイ、今日帰ってくるの遅くなりそうだ」

「えー……。また？」

「あー、悪いな。先にご飯作って食べちゃっていいから」

「う、うん……」

いつもお兄ちゃんがご飯を作ってくれる。（凄くおいしい）

でも、そのお兄ちゃんが今日は遅くなる。

電話が来るとき、大抵お兄ちゃんは六時過ぎに帰ってくる。

あ、翌日の朝六時ね。

お兄ちゃんの後輩さんが帰してくれないらしいです。

……何が起きているか、この前聞いた所、「………うん」と
死んだ目で答えてきたので、私はそれ以上聞けなかった。

とにかく、そこまで待つていたら、飢え死にする。

「じゃ、任せたぞー」

「あつ、うん」

そして通話が終了。

「……………どうしよう」

自慢じゃないけど、私は料理はおろか、家事全般ができない！！

……………そういえば、今日お姉ちゃんが早く帰ってくるはずだ。

お姉ちゃんに任せれば……………。

「いや、お姉ちゃんが上手に料理した記憶なんて無いよ……………」

再び絶望の淵に立たされた私。

今、祈ることは「お兄ちゃん、早く帰ってきて」だけだ。

とりあえず、私に出来ることをしよう。

私は台所に足をのばし、晩ごはんを作ろうと思った。

「大丈夫かな、アイツ」

俺の妹、智花は家事がまったく出来ない。

姉、美代はそれ以上にできない。

「あー、心配だ……」

火とか使わせたら絶対「鉄人」みたいになる。

あくまで、みたい、だ。

ステーキを焼く時、ワインを入れると炎上する「みたい」に家が火事になること間違い無しの気がする……。

「出前にしとけ、って言えばよかったかな……」

まあ、いい。

あの後輩から逃げ切れればいいだけだ。

俺は某メタ。ギアの蛇さんばりにあの後輩の探索から逃げる。

……………ガサツ。

「！！！」

まずった！！

例のあの後輩がこっちを振り返ってきた！！

「先輩！！ 今日という今日は逃がしませんよう！！」

「嫌だ！！ 俺は帰る！！」

俺は近くにあった自転車に乗った。

その瞬間、某頭。字Dの人もびっくりするようなカーチェイス（自転車）が始まった。

ゴメン、智花。

俺、今日中に帰れないよ……。

「……」

野菜を切ろうとしたのに、まな板だけが真っ二つになりました。

……次、いつてみよー。

とりあえず、皮は専用のピーラーで剥いてやった。

形は歪だけど。

まな板が細切れになるのに、野菜が全く切れないという不思議現象。

「……………どうして？」

私は晩ごはんを作るのを断念した……。

「ん、智花ちゃんからだ」

あたしは携帯を取り出し、電話に出る。

「お姉ちゃん？ ご飯作るの手伝って……」

困った声色の智花ちゃん。

「うん。分かった。すぐに帰るよ」

「お姉ちゃん、ありがとうー!!」

そこで、通話は切れた。

あたしは可愛い妹の為、いつもより早く帰ることにした。

……そういや、私料理でできなかったよーな……。

ま、いつか。

「お姉ちゃん、何作る？」

「とりあえず、カレー辺りがいいんじゃないかな？」

そんなわけで私たち姉妹はカレーを作ることにした。

材料は私が切った。

切った、というより、叩き割った感じだけど……。

ごめんなさい、お兄ちゃん……。

包丁とまな板を駄目にしてしまいました……。

「カレーのルーはある？」

お姉ちゃんが尋ねてきた。

私は棚の中を探してみた。

「……ウコン、ターメリック、ガラムマサラ。………」

「……………」

どうやらお兄ちゃんは本格的なカレーを作ってきたみたいです。

「どつりであんな旨いわけだ………」

と、とりあえず、これで作るしかないよね。

「でも、分量分かんないよ?」

腕を組み、呻くお姉ちゃん。

「よし、シチューにしよう!! シチューのもとあるし!!」

「うん、そうだな!!」

私たちは急遽、シチューに変更したのであった。

「……」

黙る智花ちゃん。

「……」

何も言えないあたし。

「どうしてこうなった!?!」

シチューなのに何故かライスがついていた。

ホワイトシチューのはずなのに、黒い。

シチューのはずなのに、フルーツが混入している。

なんか凄く水っぽいし……。

「……どーする。智花ちゃん?」

「……どうしよう。お姉ちゃん?」

あたしたちは、それしか食べるものが無い。

つまり、このゲデモノを食べなければならぬわけでした。

「私、イヤだよ？」

「あたしだって、まだ死にたくないよ？」

「……………」

七時となると完全にお腹が鳴る。

「こ、これを食べるしかないのか……………！！」

あたしはもう半ばヤケクソ気味に叫んだ。

そして、姉妹作の何かをスプーンに乗せ、口に運ぶ。

「お姉ちゃん！？ はやまっちゃんあ駄目ええええ！！」

智花ちゃんに押さえられた。

ハッ、あたしは何を……………？

「もうこれやばいってー。どーする……」

「もうこうなったら、お兄ちゃんが帰ってくるまで待たないかね…」

「……そうだね」

あたしたちは、秀明くんの帰りを待つことにした。

ちなみに、あのゲデモノはフルーツ&ベジタブルポンチという名前になった。

あれから丸半日。

俺はやっと帰ってこれた。

今度、買い物に付き合うということで許してもらった。

「あいつら、大丈夫かな……」

おもむろに、玄関の扉を開ける。

朝五時、時計がその時刻を指していた。

今日はまだ早い方だ。

下手したら二十四時間丸ごと追いかけ回される。

ああ、おそろしや……。

俺は身支度を済まし、リビングに向かった。

そこには姉妹揃って倒れているというショッキングな情景が広がっていた。

「智花！？ 美代ねえ！？」

俺は二人の下へ近づく。

「お、お兄ちゃん……?」

「どうした!? 何があったんだ!?」

「あれが……、あれさえ食べなければ……ガクリ」

「おい、智花!?」

俺は智花の体を揺らす。

へんじがない、ただのしかばねのようだ。

「うつ……」

美代ねえが起き上がった。

「美代ねえ!? 大丈夫か!?」

顔を上げ、俺を見つめる美代ねえ。

「私は……、侮っていた。フルーツ&ベジタブルポンチがあんなに恐ろしいものだったなんて……」

「何それ！？　どうしたことだよ！？」

「私、もうゴールしていいよね……？」

「ダメだ、美代ねえ！！　それ死亡フラグ！！」

「……………ガクリ」

「美代ねえ！！」

へんじがない、ただのしかばねのようだ。

俺は近くに転がっている取り皿を持ち上げる。

それはシチューとフルーツポンチを組み合わせた感じのものだった。

少しだけ、食した跡が残っている。

これを食べた者は間違いなく「死」を迎えるであろう代物。

「って、原因これかあああああああ!!」

俺の叫び声が街中を唸らせたのであった。

その後、フルーツ&ベジタブルポンチはスタッフが美味しく頂きました

お兄ちゃんがいないと私たち何もできないような…… b y 智花（後書き）

あ、あれ？

なんかスベった……？

智花が怖いです、どうすればいいですか？ b y 秀明（前書き）

後輩って、誰ですか？

はい、あともう少ししたら詳しいことを載せるのでしばしお待ちくだされ。

ゴールデンウィークだから調子に乗って2日連続投稿しました。

感想などあれば、遠慮なく書き込んでください。

智花が怖いです、どうすればいいですか？ b y 秀明

（秀明視点）

家族の誰よりも早く起きた俺は家族を起こすために、まず、妹の部屋に向かった。

今日、朝ご飯の作り方を教えてほしいと言っていたからだ。

とりあえず、ドアをノックし、部屋に入る。

まだ、眠っている……………。

まあ、まだ六時前だから仕方ないか…………。

妹の智花のベッドに近づく。

「…………お兄ちゃん？」

「ん、どうした？」

「……………むにゃむにゃ」

「何だ、寝言か……………」

それにしても、智花の夢の中で俺が出てくるとは、兄冥利につきるなあ……………。

それにしても、可愛いなあ……………。

ちょっと幼く感じるけど、またそれがいい。

「ソーダ買ってきて……………」

智花の口から衝撃的な台詞が出てきた。

「俺をパシリにしないでください!-!」

まさかのパシリにされました。

いや、でも何か面白そう!-!

人の寝言は面白いのが多いからね!!

俺は寝言を聞き続けることにした。

「……………お兄ちゃん、駄目だよ。そんな所舐めちゃ…………、そこはおしっこするところだよ…………?」

「ちよっ、俺、何しちやってんの!?!」

まさか妹である智花にそんなことをしでかしてしまったただなんて…………。

俺は兄失格だ…………。

「何で便器を舐めてるの…………」

「いや、本当に何しちやってんの!?! 俺!?!」

確かに変態だ!!

変態のベクトルの方向が違うけど!!

……てか、そんなイメージなのね……、智花の中では……。

「落ち込んだじゃ、駄目だよ。お兄ちゃん」

「夢の中でも気遣ってくれるのか……、さすが我が妹……!!」

「……通報したから」

「落ち込むわっ!!」

前言撤回、何か恐ろしい妹だ!!

「お兄ちゃんが死んでも、私泣かないよ……?」

「殺された!? 俺、殺された!?」

もう、訳わからん!!

俺は流れ出る涙を抑えきれずに、大量にそれを瞳からこぼしながら部屋を後にした……。

〈 秀明視点 〉

妹がアレだったので、今度は姉の美代を起こしに行くことにした。

最近バイトが忙しく、休日以外はいつも働きに行っている。

今日は日曜日。

休みだから、ぐっすり寝ている。

んー、起こさない方がいいかな。

ご飯ができるまで寝かせてあげよう。

俺は美代の部屋のドアから遠ざかった。

まあ、あと三十分したら起こすけどね。

何やら危険を察知したのか、美代ねえは身震いをしたのであった。

とりあえず、朝飯を作った。

内容は、白ご飯に味噌汁、鮭の塩焼きにサラダ、あとゴーヤーチャンプル。

ゴーヤーチャンプルは甘めに作ったから、あいづらも美味しく食べられるだろう。

働きにいく姉の体力を気遣った料理でもあり、また、発育の乏しい妹の発育を願った料理でもある。

まあ、最初は嫌がられたけど、今は大好評だ。

さて、美代ねえを起こしにいくかな……。

く秀明視点く

「美代ねえく。起きろく」

ドアの前に立ち返事を待つ。

「んー……。あと一時間寝かせて……」

な、なんて図々しい姉だ……。

「ほら、今日は金曜日だから。今日頑張れば明日明後日休みだから。早く起きろー」

ドアをノックする。

「うるさい……。あと二時間寝かせて……」

に、二倍にしたよ……、この人。

ってか、それは遅刻するだろ!!

「ほら、美代ねえ!!」

「……………」

ついには黙り込んだ。

「美代ねえ。入るぞ」

俺は部屋の中に入る。

衣服が脱ぎ散らかしているし、とてもじゃないけど、見せられない惨状が広がっていた。

「美代ねえ!!」

俺は叫んだ。

「な、何！？」

大きな声だったからか、びっくりして布団から飛び出した美代ねえ。

「この部屋を片づけなさい！！」

「えー……、後ですよ……」

「今、やれ！！ やらないと朝飯抜き！！」

「は、はい！！」

何故か、美代ねえは敬礼し、衣服から片づけ始めた。

バイト以外はだらしのない姉の手伝いをするため、俺は美代ねえの手伝いを始めた。

（美代視点）

片付けは十分程度で終わった。

秀明くんがいつもやってくれるからすぐに終わって助かるな！。

あたしなんか、服を手にとって、秀明くんに渡したただけだ。

「美代ねえ」

「何？」

「これからは毎日少しずつでいいからちゃんと片付けしろよ。」

「うん、分かった」

「ほんとに分かってます？」

「わぁーてるって！！」

「目が泳いでるぞ!!」

そんなやりとりをしながら、あたしたちはリビングへ向かった。

（秀明視点）

智花も起きてきて、椅子に行儀よく座って待っていた。

「おはよ、お兄ちゃん」と挨拶してきたが、俺は目を逸らし、「ア、オハヨ」と無機質な返事をした。

「なんか嫌われた？ 私……」

「俺をあんな奴だと思ってたなんて……、兄は凄く悲しいです」

「いったい何があったんだ……」

美代ねえが冷や汗を垂らした。

「ま、そんなことより朝飯朝飯」

智花が料理を並べ、俺が食器を取り出し、美代ねえが料理を取り分けていく。

「いただきます」

今日も、一日が始まった。

来週、晴れるといいな by 美代（前書き）

三日間連続更新、早くもネタ切れ……？

一週間ほど間が空くかもしれません。

ご了承ください。

来週、晴れるといいな by 美代

（美代視点）

しとしと雨音がする中。

あたしたち家族はリビングでそれぞれ違うことをしていた。

私はソファに座り、再放送のドラマを見ている。

大して面白くないけど、時間つぶしには丁度いいかな。

智花ちゃんは、学校の図書室から借りてきた本を読んでいた。

かなり難しい感じのする本だ。

私には到底分かりそうにない……。

ああ、何だか寂しい……。

秀明くんは、カーペットの上でぐでーんとして寝ている。

……時折、寝言が「やめろ、こっちに来るな……。そんなとこ触んな……。この変態後輩め！」と、何だかとっても可哀想だった。

秀明くんも大変なんだな……。

でも、雨の日って嫌だな……。

ジメジメするし、雨が上がってもぐちよぐちよするし……。

こんな中、大学なんて行った日には風邪引くよね……。

あたしはテレビのチャンネルを変えた。

「只今の台風の状況です。西日本から」

それをなんとなく耳に入れながら、外を見る。

だいぶ激しくなっている。

あたしは大きなため息をついて、ソファーに横になった。

〔智花視点〕

「あー、お腹すいたなー……」

私は読んでいた本を閉じ、隣でうなされているお兄ちゃんを揺り起こす。

「うおー、妹だけには手を出すな……、いやだからって俺を襲うな！！ やめろおお！！ そんなプレイは存在しない！！ ……」

いったいどんな夢なのよ！！

な、なんか起こしてあげないと可哀想だよ……。

とりあえず、おでこを軽くぺちぺちと音がなるように軽く叩き、するとようやくお兄ちゃんが起きた。

「お兄ちゃん。何か作って。お腹すいた……」

「おー、何だ。智花か……。ちょっと待ってる」

するとお兄ちゃんはおもむろに立ち上がり、キッチンへと向かった。

数分後。

パンケーキを三つ作ったお兄ちゃんがキッチンから姿を表した。

「はい、どうぞ。美代ねえの分もあるからなー」

「わあ……。おいしそう……」

相変わらず、お兄ちゃんは料理が得意だなあ。

一口食べてみると、甘さが口の中を広がり、幸せな気分になっていくのを感じた。

私もこんな料理を作りたいなあ。

「おいしい……。お兄ちゃん、凄いよ」

お兄ちゃんの方を振り返る。

「ZZZ……」

……寝ちゃってるし。

料理、今日こそ教えてもらおうと思ったのにな……。

私はため息を吐いた。

私はさっきの本を開き、読み始めた。

（秀明視点）

俺はまどろみの中、後輩に追いかけて回され、しまいには軽く十八禁（もちろん性的な意味で）行為を仕掛けられたので、俺は何度も目覚めては寝て、目覚めては寝ての繰り返しをしていた。

なんで、夢にまで出てくるんだよ……。

俺の安眠を返せ！！

って、また来たああああ……！！

飛び起きる俺。

ゴッソ！！

「いった！？」

「うぐっ！！」

俺は後頭部を押さえる。

智花は何故か鼻を押さえていた。

どうやら智花にあたった模様だ。

「だ、大丈夫か？」

「う、うん……。お兄ちゃん、凄くうなされてたけど、大丈夫？」

「あ、ああ。大丈夫、だ」

それを聞いた智花が安心したのか、本をまた読み始めた。

それにしても、夢の中まであの後輩が出てくるなんて……。

俺は大きいため息をつき、点いたままのテレビに視線を合わせた。

〈秀明視点〉

「「「テンション下がるわ！」「」「」

俺たち家族全員が叫んだ。

「あー、もう暇すぎるー!!」

美代ねえが叫ぶ。

俺もそれには同意する。

「あ、だったらトランプでもしようよ」

智花が提案する。

「あ、それいいかも」

美代ねえが賛成する。

「じゃあ、俺持ってくる」

俺は棚の引き出しからトランプを取り出す。

「何しようか？ いっせーのせで言ってみるか」

「いっせーのせ……」

「ポーカー」

「大富豪」

「ババ抜き」

ここにきて統一感がない！！

「じゃあ、まずはババ抜きでカード全部あるか確かめようか」

手際よく美代ねえが配っていく。

「……………」

俺の手札が死んでいます。

なにゆえに、ペアが無いのか？

美代ねえはなにゆえに、俺の手札を破壊したのか？

手札を破壊する、すなわち、心を破壊することと同義なり。

まあ、一応二、三ペアあったからいいものの……。

それはともかく、トランプという名の暇つぶしが始まった。

〔智花視点〕

あれから三十分は経った。

今はポーカーに変わっている。

私はババ抜き以外のカードゲームは一回もお兄ちゃんに勝っていない。
い。

どうやらお兄ちゃんは、大富豪とかは得意だけど、運試し系とかに

は弱いらしい。

大富豪では「革命王子・ナポレオン」だったお兄ちゃんが、ポーカーでは「無勝王子・ヒデアーキ」になっている。

ルールは二回まで山札からカードを交換できて、より強い役を作った人が勝つという簡単なもの。

ちなみに、みんなはお小遣いをかけている。

負けられない、絶対に。

負けられない戦いがそこにある！！

「フルハウス」とお姉ちゃん。

私はストレート。

「……………ワンペア」

お兄ちゃん運が無いみたいです。

お兄ちゃんはこれで十戦中、十敗だ。

むしろ不憫に思えてきた。

「か、勝てない……!!」

がつくりうなだれるお兄ちゃん。

「今度こそ……!!」

それでも起き上がった!!

「掛け金無いけどね」

にやにやしながらお兄ちゃんを見つめるお姉ちゃん。

「バタリ」

お兄ちゃん、ご臨終です。

南無、お兄ちゃんのことには忘れないよ……。

〈秀明視点〉

お小遣いをこっそり奪われた俺は、しまいには労働までかけなければいけなくなった。

主な内容、マッサージ、パシリ、宿題の手伝い、夕ご飯作り、
e t
c……。

これ以上増やしたくない！！

「これで最後にしようか」

美代ねえが提案してきた。

「じゃあ、最後に勝った人は敗者一人に何でも出来る権利を与える
ってことでいいかな？」

それはもののすごく俺が不利じゃ……。

「何にしようかな？ お姉ちゃん」

「そうだね……、一週間奴隷なんてどう？」

「それはちよつと……。ずっと家事を任せるとかの方が私たちは楽だよ？」

なんでお前らは俺をチラチラ見ながらそんなこと言うんだ！！

くっそー！！ 負けられない！！

負けられない戦いがそこにある！！

「いつくぜえええ！！ 俺のターン、カードドロー！！」

「「ジャンルが違うし！！」」

なんか突っ込まれた。

くっそー、勢いを殺いでいくやつらだなー、おい!!

五枚渡った所で手札を確認。

今の段階では、ブタ。

スピードのエースとジャックを残し、後は交換。

頼む!! 来てくれ……!!

「ドロオオツ!! ムウオンスタアカアアド!!」

「だまらっしゃい!!」

「ぶへらっ!!」

美代ねえにビンタされた。

オヤジにもぶたれたことないのに……!!

加えたカードはスペードのクイーンにハードのキング、クラブの10だった。

ロイヤルストレート……これはいける。

「じゃあ、いくぜ……」

俺は勝利を確信した。

「「「いつせーのーせ……」」」

「ロイヤルストレート」

「スリーカード」と美代ねえ。

「ツーパー」と智花。

二人の顔が歪む。

「俺の勝ちだあああー!!」

俺は手を上に上げ、背中から倒れた。

「ま、負けた？ あたしが、負けた……？」

美代ねえは床に手をつき、うなだれた。

「予想外の展開……」

智花も同じくうなだれた。

「さーて、何にしておらおうか……」

「「うつ」」

二人は縮こまった。

二人を見つめる俺。

「じゃあね……」

何故か死の宣告を受けるような表情を浮かべている。

そんな非道なことはしないっつーのー！

「今度の休みに、みんなでどっか行こうか」

「へ？」

意外そうな顔をする姉妹。

「たまには家族で出かけるのもなかなかいいもんだろ？」

「……………そうだね」

智花がちよっぴり嬉しそうに笑った。

「もう、秀明くんったら……」

小さくため息をつく美代ねえ。

俺は家族に笑顔を見せた。

日程は来週の日曜日になった。

雨が降らないことを今のうちから祈りつつ、俺は家族の要求してきたマッサージやら飯づくりやらその他諸々を楽しくやった。

来週、晴れますように。

来週、晴れるといいな b y 美代（後書き）

誤字、脱字などあれば何なりとご記入ください。

困った弟ね…… by 美代（前書き）

なんか思ったより早く出来たので投稿します。

何かあれば報告お願いします。

徹夜は、辛かった……

困った弟ね…… by 美代

（秀明視点）

「37.4度……」

まずいな……。

今日、俺が朝ご飯の当番なのに……。

頭も痛いし、寒気も酷い。

視界が歪んでいる。

あー、何か幻覚らしきものがあああああ……。

駄目だ駄目だ、俺。

ちゃんとあいつらの飯を作らないと……。

俺は頭を押さえながら、台所へと向かった。

〔智花視点〕

「おはよー……、お兄ちゃん」

お兄ちゃんを手伝いをするため、早起きした私。

今日こそ、玉子焼きを上手に作りたい。

エプロンを着込み、私は台所に向かう。

そこにはお兄ちゃんがいた。

空っぽの鍋を大根でかき混ぜながら、「明後日の朝ご飯はスタミナ
丼にしよう」と呟いていた。

「お兄ちゃん！？ どうしたの!？」

ついにおかしくなっちゃった!!

私は異常行動するお兄ちゃんの腕を掴み揺らした。

「お兄ちゃん!?　しっかりして!!」

「うおー、俺はしっかりしてるぞー」

その言葉ほど信用ならない言葉はないと思う!!

「いや、お兄ちゃん絶対に熱あるでしょ!!」

「知らん知らん。俺は元気だ!!　ほら、お前は食器でもそっちに運んでくれ」

そう言い、私に下着を渡した。

「って、それ私の下着!!」

「あ、あれ？」

兄、秀明はついに犯罪者になりました。

「お兄ちゃんのバカ!!」

私はそう叫び、お兄ちゃん、いや、犯罪者の下から去った。

（秀明視点）

「あれ……？　俺は今まで何を……」

「どないした？　秀明くん？　さっき智花ちゃんが泣きながら出ていったけど」

「いや、特に何も……」

生返事なような気がするが、まあ、どうでもいい。

「ならいいけど……。今日は仕事早く行かないとだから簡単な奴でお願い」

「ああ、分かった」

俺は包丁を手に取り、朝飯を作り始めた。

（美代視点）

やっぱり、おかしい。

秀明くんはいつも美味しい料理を作ってくれるけど、今日は違った。

得体の知れない、そう「フルーツ&ベジタブルポンチ」と同等以上の料理が出てきた。

智花ちゃんも、秀明くんを心配そうに見つめている。

すると、秀明くんは、

「I want to feel OPPAI……」

……通報しよ。

〔智花視点〕

お兄ちゃんの様子、やっぱりおかしいと思う。

「俺は変態レンジャー、腹黒ピンクー！」とか言ってたし……。

絶対、風邪ひいてるよ……。

「俺、また罪深い名言を思いついたぜ……」

最早、変態の戯言だと思う今日この頃。

「黒い白馬にまたがって、前へ前へとバツクした」

ついには狂ってしまった……。

もう、どうしようもない……。

（秀明視点）

なんか色々と社会的にマズいことを言ってた気がする。

みんなが食べ終わって、皿を片づけようとした時。

「お兄ちゃん、熱計ろうか」

おもむろに懷から体温計を取り出す智花。

「そうだね、なんか熱っぽいし」

後ろから羽交い締めにしてきた美代ねえ。

あー、胸が当たって何だか気持ちいい……。

着ていた服を無理やり脱がされ脇に体温計を突っ込む智花。

あー、妹に服を脱がされた……。

姉に後ろから抱きしめられ、妹に犯されそうになる俺。

これなんてエロゲ？

ピピッ。

「……………37'9度」

智花がそう言った。

あ、しまった……。

すると、美代ねえが俺の肩に手を置く。

「ちょっと部屋に行こうか」

美代ねえに無理やり部屋に連れて行かれそうになったので、俺はよ

けた。

「「「あ」「」」

俺たちが同時に発言した。

どうやら俺はバランスを崩したみたいだ。

そのまま眠るように意識が無くなった。

あーあ、熱あることバレちゃった……。

く美代視点く

「んん………?」

秀明くんはうめきながら体を起こした。

「起きた?」

「ああ……。そうだ、学校……」

ベッドから抜け出そうとした秀明くんを制止する。

「だーめ、ちゃんと寝ないと」

「でも……」

困惑した表情を浮かべる秀明くん。

「熱があるんだからしっかり寝る」

「うう……」

渋谷布団に潜り込んだ。

「お粥持ってくるから、ちょっと待ってて」

あたしはそう言い残し、部屋を出た。

三十分後。

「できたよー」

「……………これ、マジで食べ物？」

「ひどっ！！ 秀明くんのために作ったのに……………」

「ああっ、悪い悪い！！！」

「じゃあ、食べてみて」

「あ、ああ……………」

それでもなかなか食べようとしない秀明くん。

「じゃあ、あたしが食べさせてあげるから」

「え」

ちょっと恥ずかしそうに目をそらされた。

「ほら、あーん」

「……………」

秀明くんが口を開ける。

「どう？　おいしいかな？」

「……………」

あ、あれ？　返事がない。

……………味見してみよ。

パクリ。

「……………」

ゴメン、秀明くん。

お気持ち、お察します。

あたしたち姉弟は意識を失った。

〈秀明視点〉

気付くと、美代ねえが俺の体を拭いていた。

どうやら寝汗が酷かったようだ。

何かとんでもない料理を永遠に食わされる夢を見た。

夢で良かった……。

あれ、夢じゃなかったような……？

まあ、いいか。

「なあ、美代ねえ。大学行かなくていいのか？ バイトも入ってるだろ？」

俺は汗を吹いてくれている美代ねえに話しかけた。

「ん、今日は休んだ」

「単位とか大丈夫なのか？」

「まあ、大丈夫。友達に代理任せてるから」

「そうか」

会話はそこで終了。

なんだろう、この微妙に気まずい雰囲気は……？

すると、空気を察したのか、美代ねえが口を開いた。

「熱あるならちゃんと言ってよ」

「ゴメン」

「素直でよろしい」

「……でも、心配かけたくなかったし……」

「隠し事をされる方が心配するよ」

「うつ」

確かに、そうかもしれない。

「ねえ、何のためにあたしたちがいると思う？」

「？」

「支え合つたためにいるんだよ。だって家族でしょ？」

「……………そうだな」

「でしょ？」

俺は思わず笑顔になった。

美代ねえもつられて笑った。

何だか今日は幸せだな。

（智花視点）

「お兄ちゃん、大丈夫かな？」

帰り道、自然と足が速く動いた。

「あー」

若い女の人の声がした。

「はい、何でしょう？」

とても小さな女の子だった。

外人とのハーフなのか、日本人の顔立ちに金髪碧眼の要素を加えたみたいだ。

「この近くに引っ越してきたんですけど、道に迷ってしまって…」

困惑気味に辺りを見渡し、照れくさそうに笑った。

「あ、だったら案内しますよ」

「本当ですか、ありがとうございます!!」

その少女はペコリと一礼した。

まるで、日本人みたいに。

「どの辺りに引っ越したんですか？」

「えーと、近くに駄菓子屋さんがあって……、猫がたくさんいました」

「あ、私知ってます。その近くに住んでいます」

「奇遇ですね」

そんなやりとりをしながら、私たちは家に着いた。

そのハーフの子は、すぐ隣の家に入っていた。

「まさかお隣さんだったとは……」

「アンネもびっくりです」

名前はアンネリーゼ・長塚。

アンネ、と自分のことを呼んでるらしい。

「また今度、挨拶しに伺うので、その時にまた」

「はい、分かりました」

そう言い、アンネリーゼさんは帰って行った。

〈秀明視点〉

美代ねえの看護のおかげで大分元気になった。

美代ねえは疲れたのか、腕枕をして眠っている。

さつき智花の声がしたからもう帰ってきたのだろう。

俺は、夕ご飯を作るため、キッチンに向かった。

夕ご飯の時、智花が心配そうに見つめてきたので、頭を撫でて、「もう大丈夫だよ」と言ったら、「よかった……」と安堵の表情を浮かべてくれた。

これからは、心配かけないようにしないとな……。

三人で夕ご飯を食べながら、ふとそんなことを思った。

困った弟ね…… by 美代（後書き）

キャラ追加

アンネリーゼ・長塚

小学6年生 一人称「アンネ」

次はもう少し遅くなるかも知れません。

引っ越してきたのは金髪美少女!! by 秀明（前書き）

お待たせしました

テスト、近いんですよ……

引っ越してきたのは金髪美少女！！ by 秀明

（秀明視点）

「そつえば、お兄ちゃん」

智花が俺に話しかけてきた。

「どうした？」

「お兄ちゃん、前に金髪の可愛い女の子を思いっきり愛でたい、って言ってたよね？」

「あー、そんなことを言った気がする」

……我ながら変態すぎる。

「そんなわけで、お隣にそんな女の子が引っ越して来ました」

「どついうわけで！？」

「もう来てるよー」

「はやっ!」

動揺を隠せぬまま、お隣さんが入ってくるのを見ることしかできなかった。

「!」

そこには、俺が追い求めていた理想が存在なさっていた。

輝く金髪、潤んだ碧眼、小さな四肢、どれを見ても申し分ない。

なんてこった……!!

こんなにも破壊力があるなんて……!!

「ちょ、お兄ちゃん!?　なんで鼻血と涙を同時に流してるの!」

「うくっ」

ヤバイヤバイ。

「あ、あのー。大丈夫ですか？」

金髪碧眼の少女様が俺にティッシュを渡してきた。

な、なんていい子なんだッ！！

抱きしめたい！！

「お兄ちゃん！！」

ハッ、いったい俺は何を……？

「あ、あのー」

「は、はひっ！？」

動揺しまくりな俺。

なんか気持ち悪いぞ、俺……。

「アンネは、アンネリーゼ・長塚っていいです。隣に引っ越して来ました」

一人称が、「アンネ」だお！？

ますますいいじゃねえか！！

「これからよろしく願いします」

ペコリと一礼し、笑顔を見せたアンネリーゼ様。

「こちらこそッ……！」

土下座の域に達する勢いで、俺は頭を下げる。

「お兄ちゃんがおかしくなった……！」

智花が俺の肩を掴み、揺らしてきた。

「目を覚まして!! お兄ちゃん!!」

「うわあああああ!?!」

視界があり得んくらい歪んだらなる!!

「お姉ちゃん!! お願い!!」

「OK、任しといて!!」

気付けば、美代ねえの足が目の前に迫っていた。

「ひでぶ!!」

頭がぶつ飛んだ気がしたけど、分からない。

足が見えた瞬間、俺の中に眠っていた「危険察知アビリティ」が発動し、「心の防衛システム」が起動したため、俺は気絶してしまっただからだ。

それにしても。

美代ねえのパンツ、今日は黒色だったな……。

ごちそうさまでした。

ハラ、いっぱいだあ……。

〔美代視点〕

「おい、起きろ」

あたしは秀明くんを揺さぶってみた。

「起きないよ……。お姉ちゃん、どうするっ」

「もしかして、殺っちゃった？」

「やっちゃったって、お姉ちゃん!？」

マズい、このままじゃあたしが殺人犯になってしまう。

そしたら智花ちゃんが虐められるかもしれない……。

それは絶対に避けたい。

「証拠、隠滅……。」

これしかない。

「え?」

驚いたアンネちゃん。

「工具箱持ってきて」

あたしはボソリと呟くと、智花ちゃんが黙って工具を取り出してきた。

「お姉ちゃん、まさかとは思うけど……」

あたしは、死体を隠す。

そのためなら、どんなに心が叫んでも……！！

「って、ダメだよ！！ お姉ちゃん！！」

「駄目です！！ 美代さん！！」

智花ちゃんとアンネちゃんが止めに入った。

「ハッ、あたしはいつたい何を……」

いけない、危うく私は猟奇的殺人犯になるところだった。

某HINAMIZAWAの住人の仲間入りになるところだった。

「うつ……」

「あつ、お兄ちゃんが起きた!!」

起きた？ あ、ホントだ。

「美代ねえ!! 酷い!!」

「ゴメンゴメン。まさかこんなことになるとは……」

「美代ねえのパンツは今までしませんでしたのに、美代ねえ、酷いぞあべしっ!!」

あたしは思わず回し蹴りをかましていた。

吹っ飛ぶ秀明くん。

さよなら、秀明くん。

君のことは忘れない。

……………明日までは。

（アンネ視点）

変わった家族、それが第一印象でした。

「いきなり蹴るなんて人外だな！！ 美代ねえは！！」

秀明さんが美代さんに向かって怒鳴っている。

「人の下着を覗いておきながらよくそんなこと言えるね！！」

「お姉ちゃんもお兄ちゃんも喧嘩しないで！！」

智花さんが間に入る。

「何おう！！」

「こっちだって！！」

「「いーっ!!」」

「二人とも!!」

……でも、何だかんだで仲良さそうです。

皆さん、笑顔ですし。

アンネも、こんな家族が欲しかったです。

「許すまじ!! 変質者!!」

「ハッ!! 殺人鬼がよく言うぜ!!」

「だから、二人とも落ち着いて!!」

……とても疲れそうですけど。

〈智花視点〉

「ゴメンね、アンネさん。騒がしくって」

私は戸惑っているであろうアンネさんに話しかけた。

「いえ、面白い家族ですね」

クスクスと笑うアンネさん。

「智花さんが少し羨ましいです」

「そう……」

確かに面白いけど、時々冗談が過ぎているような……。

……うん、気のせいだよね!!

「美代ねえ!! アンタはなんもわかつちやいない!! 縞パンの
素晴らしさを!!」

「分かりたくないわよ！！ そんなもの！！」

最近、お兄ちゃんの頭がイキ始めてるような……。

アンネさんも苦笑している。

………何だかんだで家族の中で一番マトモな人間って、私だけなんじゃ……。

お兄ちゃんはアレな感じだし、お姉ちゃんもアレな感じだったし。

でも、それを含めて、私たちは家族なんだ。

じゃあ、私もアレな感じなのかな……？

「あー、智花さん？」

「あ、はい？」

「ボンヤリしてたので、大丈夫かなと思ひまして」

「私は大丈夫です。でも……」

「アンネは大丈夫だと思います。だって、皆さん、笑顔なんですから」

「確かに、そうですね……」

思わず笑顔がこぼれた。

騒がしくって、疲れるし、大変だけど、毎日が楽しい。

「皆のおかげかな」

「？　なんですか、智花さん？」

「えっ、あつ、いや、何でもないです」

ちゃんと私は笑えてる。

心から、笑えてる。

それに気づけて、嬉しかった。

「じゃあ、私は止めに入ってきます」

「アンネも協力します」

「ありがとう」

「二人とも、いい加減に喧嘩を止めて!!」

「そうですね、喧嘩は駄目ですよ」

もう皆笑顔だった。

〈智花視点〉

アンネさんが帰る時も、ご飯を食べてる時も、リビングでくつろいでる時も、ずっと笑顔だった。

いつまで、こうしていられるのかな？

大人になって、独り立ちしたら、今みたいな笑顔でいられるかな？

できれば、いつまでも、皆と笑っていたいな……。

笑っお姉ちゃんとお兄ちゃんを見て、そんなことを考えた。

引っ越してきたのは金髪美少女！！ by 秀明（後書き）

GOJI、DATSUJIがあれば、ご報告お願いします。

すいません、上はふざけました

約束のお出かけの日がやってきました b y 秀明（前書き）

テストが色んな意味でおわつて（r y

約束のお出かけの日がやってきました by 秀明

（秀明視点）

「美代ねえ！！ はやく！！」

「分かってるって！！」

「智花はちゃんと付いてきてる！？」

「私が手を繋いでるから大丈夫！！」

「もう、ダメ……。私ダメかも……」

「まったく、今日出掛けるのを分かってたんだろ！？ 何で寝坊したのさ！？」

「夢の中にお兄ちゃんが出てきたから」（棒読み）

「同じく」（棒読み）

「嘘だッ！！　　ってか、急げええ！！」

俺たち家族、電車に乗り遅れそうになる、の巻。

「待てやゴルアアア！！」

それを聞いた駅員がビクツと体を震わし、閉めるのを止めてくれた。

その際に電車内に滑り込む俺たち。

「な、なんとか間に合った……」

智花が電車の席に座りこみ、荒く息を吐いている。

「そうだね……」

美代ねえもそれに同意した。

俺は運動が出来る方だけど、もうつたくた……。

「美代ねえも、大丈夫？」

「まあね」

三人ほぼ同時に座席に座り込んだ。

真ん中が俺で、左側が智花、右側が美代ねえ。

ああ見えて、美代ねえは男嫌いだし、智花は学校の男子に話しかけられただけでも赤くなる。

でも、俺にはそんな様子を少しも見せない。

むしろ、遠慮がないくらい攻撃される。

……なんか役得なのか、損なのか、イマイチ分からん。

まあ、悪い気はしないからいいけどさ。

窓から見える風景をふと眺める。

俺たちが住んでる所は、結構田舎だ。

そこからさらに田舎に向かっている。

そんなのどかな景色が広がっている。

「ねえ、お兄ちゃん。どこ向かってるの？」

「自然公園だよ」

こんな所だから、かなり質のいい公園がある。

そこで、ノンビリと過ごそうということだ。

ちゃんと弁当も作った。

姉妹は当てにならないので、台所から除外した。

……台所クライシスはもう起こしたくない。

電車がガタガタ揺れ、それに合わせるかのように体が動く。

まるでゆりかごに寝ているみたいだ。

朝早かったし、ちょっと眠ろう。

俺はまどろみの中、そんなことを思った。

あれからどれくらい経っただろうか。

降りるべき駅まで、あと数分で着く。

両隣で俺の肩に頭を預けている二人を揺り起こす。

「……………もう着くの?」

目を擦りながらあくびをする智花。

「結構眠っちゃったな……」

背伸びし、ボーっとする美代ねえ。

「ほら、もう着くぞ。起きた起きた」

自然公園前の駅に到着した。

ブーブー文句を言う二人を無理矢理起こしその場を後にした俺たちだった。

〈智花視点〉

「すごい……」

こんな近くに綺麗な場所があったなんて……、知らなかった。

「なかなか、だろ？」

お兄ちゃんが自慢げに笑った。

「でも、ここじゃないんだな。目的地は」

「え、ここじゃない？」

お姉ちゃんが疑問を浮かべる。

「もっと先にあるよ」

「どの辺？」

「それは秘密」

「ふーん。そんないい所なんだ。期待してるよ。あの秀明くんが言い洪るんだから」

につこり笑い、お姉ちゃんはお兄ちゃんの肩に手を置く。

「なんとなくプレッシャー……」

ガツクリうなだれるお兄ちゃんは、「こっちだ」と言い、私たちを
引き連れ、道を歩きだした。

〈美代視点〉

あれから十分は経過した。

まだまだ着く気配は微塵にも感じない。

「秀明くん。まだ着かない？」

さすがに疲れてきた……。

「……あと、十分くらい？」

「十分前にも言わなかったっけ？ そのセリフ」

「……………なんのことやら」

「うおーい」

あたしは軽く秀明くんの頭を二、三回小突く。

「もー疲れたー!!」

いきなり智花ちゃんが叫んだ。

そして、丁度あった椅子に座り込んだ。

「ちょっと休んでいこうよ」

おねだりするような表情を見せられ、あたしは思わず「じゃあ、あたしも休もう」と言ってしまった。

「まったく、二人とも仕方ないな……」

ため息をつき、秀明くんも椅子に座った。

「はい、水筒」

「ありがとう」

元からコップが三つ付いているという珍しい水筒。

秀明くんはそれぞれ均等に分けてくれた。

ちょっとした気遣いが嬉しい。

その後、数分ほど、どうでもいいような会話を交わし、一息ついたところであたしたちは出発した。

（秀明視点）

「ねー、秀明くん。あと何分で着く？」

「……あと、十分くらい？」

「お兄ちゃん。それ十分前に言った。そのまた十分前にも」

「知らんがな」

ゴッソ。

デユクシ。

智花と美代ねえに殴られました。

智花のは痛くないけれど、美代ねえのは半端ない痛さだ。

それはもう俺が地面に顔を突っ込み地面を嫌でも舐めてしまつくらいに。

俺、k n o c k o u t .

「あ、殺っちゃった」

「やっちゃったじゃないよ!-!」

なんか二人が騒いでるけど、俺はそのまま意識を失ったから、その後の会話を聞くことができなかった。

でも、なんとなく何をされるかは分かってしまった。

死体は処理されるんですね、わかります。

あー、埋めないでー。

「てめえらいい加減にしやがれえええええ！」

「あ、生きてたの。……チ」

「チ、じゃねえよ！！ 美代ねえ！！」

「はい、次いつてみよー」

「仕切るな！」

まだ、目的地には着かない。

数時間後。

「こっち、……のはず」

「あれから何時間たったかな？ お姉ちゃん」

「少なくとも二時間は過ぎたと思う」

「……………」

ああ、視線が突き刺さって痛いんだZE！！

「だ、大丈夫だって！！ もうすぐ着くから！！」

何とかごまかそうとする俺、すごく……小さいです。（器が）

「あ、こっちだよ」

「………」

もはや信用すらしてくれない。

「……ほら、こっちだって」

俺は二人の手を掴み、上へ上へと走っていった。

〈智花視点〉

そこには、言葉にできない風景が広がっていた。

「すごい……」

幻想的。

それが、最初に浮かんだ言葉だった。

木漏れ日が地を照らし、草木が光り、とても落ち着く雰囲気漂っている。

髪を撫でる風が気持ちいい。

お姉ちゃんも、感慨深そうにその風景を見つめる。

「どうだ？　すごいだろ？」

お兄ちゃんが自慢げに笑った。

「……よく見つけたよね」

「ま、後輩に教えてもらっただけだな」

「へえ……」

私はその風景を眺めた。

「もうそろそろお昼だし、飯でも食つか」

お兄ちゃんがリュックから弁当を取り出した。

「じゃあ、そうしようかな」

お姉ちゃんがシートを敷いて、お昼ご飯を食べられる環境を作り出した。

「と、いうわけで」

「「「いただきまーす」」」

く秀明視点く

「いやー、楽しかったね」

「綺麗なところだったよね」

「喜んでもらえて何よりだ」

帰り道、そんな会話を交わしながら家に向かう俺たち。

「今日のご飯は……、簡単なやつでいい？」

「いいよ」

「うん。お願い」

俺は玄関の鍵を開け、リビングに入った。

そこには、有り得ない風景が広がっていた。

「……………」

二階の物置部屋の床をぶち抜いてリビングに落下していました。

目の前には、ゲームやらマンガやらグッズやらで埋め尽くされたというカオスな空間が広がっていた。

「秀明くん？ …… って!」

美代ねえがなんか叫んでた気がしたけど、そんなことより。

…………… 母さんに殺される。

「もう、これは…………… どうしようも無い……………」

とりあえず、母さんになんて言い訳をしようか、考えることにした俺であった……………。

約束のお出かけの日がやってきました b y 秀明（後書き）

なんだがマンネリ気味な気がするのは気のせいだと思いたい!!

料理のできない女って……

b y 秀明（前書き）

ちょっとシリアス入ります

料理のできない女って……

by 秀明

（秀明視点）

「秀明さん。昨日何かあったんですか？　すごい音でしたよ」

「ああ。あれは大変だったよ……。まさか床が抜けるとは……」

アンネちゃんと話す俺。

いや、でも昨日はホント酷かった……。

台所クライシスを遥かに上回ったぞ……。

まあ、なんとかしたけどさ。

一応、応急処置はした。

……………もちろん、母さんにメツチャ怒られました。

何故か、たまにしか帰ってこない母さんが、昨日帰ってきた。

何とか誤魔化せると思ってたのに……。

チキシヨー!!

……とりあえず、アンネちゃんのご両親が帰ってくるまで、俺はアンネちゃんの面倒を見ることになった。

美代ねえと智花はそれぞれ用事があったみたいで、アンネちゃんが来た時にはすでに出かけていた。

とりあえず、ケーキを作ったので、紅茶も付けて渡すと、「ありがとうございます」と笑顔を返してくれた。

やっぱりかわええなあ……。

「おいしい……」

「マジか、良かった」

俺は紅茶をすすりながら、外を見た。

憎すぎるほどの晴天。

アンネちゃんと出掛けるのもいいかな、と最初だけ思った。

周囲からロリコンとか言われそんな気がしたので、諦めた。

だって今までが今までだからね……。

ああ、どうしてこうなった!!

「これどうやって作ったんですか？ よければ、アンネに教えて下さい」

「ん、いいけど……。料理作れるの？」

「……………できないです」

……………やっぱい。

何故か俺の知り合い（女性）はほぼ全員が料理できない。

俺が懇切丁寧に教えているが、全く成長しない。

アンネちゃんはどうだろうか？

「じゃあ、エクレアでも作ってみるか」

「はい！！」

いい返事が返ってきたのを聞きながら俺たちは台所に向かった。

（秀明視点）

「……まさか文字通り、電子レンジを爆発させる人を始めて見ましたよ。アンネさん」

「キッチンが真っ黒ですね。秀明さん」

………台風が目だった。

まさかここまでだったとは……。

兄さんは悲しいです。

まあ、いつも智花が料理道具を壊すから替えがある。

心配ない。

………さよなら、十代目。

こんにちは、十一代目。

「じゃあ、最初から作り直そうか」

「………はい」

申し訳なさそうに縮こまるアンネちゃん。

「気にすんなって。智花とかいっつも包丁を駄目にするから」

「でもレンジは……」

「美代ねえなんか、この前キッチンを再起不能の一步手前までに追い込んだからな」

「えっ！！　そうなんですか！？」

「そうだよ」

あれは思い出したくない。

台所クライシスだ……。

「秀明さん！？　何か明後日の方向を見つめるような眼差しなんですけど……！」

「嫌な、事件だったね……」

「いったい何があったんですか!？」

「……………うん」

「……………はあ」

察したのか、アンネちゃんはそれ以上聞いてこなかった。

〈秀明視点〉

「これはひどい」

思わずそんな言葉が出てきた。

「す、すいません」

申し訳なさそうに頭を垂れたアンネちゃん。

……………今まで会ってきた女性の中で一番料理の腕が残念だった。

ホント、どうしてこうなった!!

キッチンが壊滅しました。

こればかりはどうしようもない……。

ああ……、母さんに殺される……。

「秀明さんが真っ白な灰になってます!! 起きてください!!」

なんか揺らされてるけど、もーどーにでもなれー。

「今度は笑顔になりました!! 清々しいです!! でも逆に怖い
です!!」

「アンネちゃん。……………」

俺は無言で笑いかけ

「掃除、しょうか」

懇切丁寧に申し上げました。

「はい……………」

（美代視点）

「何で今更来たんですか？」

あたしは苛立ちを隠さずに言葉を放った。

相手は少し弱ったそうに笑い、悠々とコーヒーを飲んでいる。

「元々はそういう約束がありましたからね」

あたしに笑顔を見せた。

といつても気分がいいものなんかじゃない。

営業スマイル、というものかもしれない。

「約束？」

「おや、聞いていないんですか？ 通りで……」

……………腹立つ。

穏やかで、優しい性格を醸し出しているように見えるが、それはあくまで外的イメージ。

中身はとんでもない人間だ。

あたしも、騙された。

母さんも、騙された。

秀明くんも、智花ちゃんも、騙された。

「あと、1ヶ月です。それまでにはどうするか決めてください」

「……………」

「辛いのは分かりますが、あなたの母親との約束ですから」

悲しそうに顔を伏せる。

「……………」

知ったこっちゃない。

「では、お願いします」

「……………待つて」

私は、かつての父親を止める。

「何ですか？」

「どうして、今更引き取ろうとするんですか？」

私は男を睨みつける。

「前にも申した通り、優花との約束ですから」

優花、あたしたちの母親の名前。

「約束って何ですか？」

「……………分かってるはずですよ」

「……………」

「まあ、いいでしょう。あと1ヶ月ですから。このことを他の家族の皆さんにお伝えください」

そう言い残し、金を置いて出て行った。

……………どうしよう。

あたしはそのままテーブルを見つめることしかできなかった。

そういえば、ここの喫茶店はこの男と初めて会った場所だ。

確かに美味しいコーヒーを出す。

でも、何故か好きにはなれない。

やっぱり、この男が関係しているからか。

あたしはあの男が驕ったコーヒーには一口も口に付けず、喫茶店を後にした。

〈美代視点〉

どうしよう……。

お母さんはそのことを知ってるから、聞けない。

智花ちゃんには、とてもじゃないけど、言えない。

秀明くんには、これ以上負担を増やしたくない。

あたしは、どうすればいい？

誰か、教えてよ……。

〈秀明視点〉

ようやく片付けが終わった。

第二次台所クライシスだ……。

これからは何人たりとも厨房には入れない！！

俺はそう固く誓った。

「ただいま……」

あ、美代ねえが帰ってきた。

な、なんか元気なさそうだな。

俺とアンネちゃんは玄関に向かった。

「美代ねえ？」

「ん、何？」

いつもの顔だ。

あれ？ いつもと同じ？

………気のせいかな？

でも、違う気がする。

確証は無いけれど。

「そうだ、美代ねえ。美代ねえもエクレア作る？」

「……………今日は遠慮しとく」

「そう、か……………」

やっぱり、なんか元気ないな……………。

美代ねえは俺たちに顔を見せることなく、部屋に行った。

俺は黙ってそれを見つめることしかできなかった。

アンネが怪訝^{けげん}そうに美代ねえを見つめている。

「じゃあ、俺たちだけで作り直そうか」

「はい」

一時間ちょいで出来たエクレア。

結構俺の得意料理だけど、何故かおいしくなかった。

いや、マズくはないけど、なんかおいしいとは思えなかった。

……………悪いことが起きなきゃいいけどな。

料理のできない女って……

b y 秀明（後書き）

誤字脱字があれば何なりとお申し付け下さい

お兄ちゃんの後輩が、遂に……！！ by 智花（前書き）

遂に後輩が降臨します。

斎藤 恋

高校一年生、一人称……「わたし」

あと、投稿したものが間違っていたため、前の話は一旦削除しましたのでご了承下さい。

お兄ちゃんの後輩が、遂に……！！ by 智花

「……………」

怒った表情を醸し出している智花が、右にいる。

なんか見ることができないので、左に振り返る。

「……………」

まるで変態を睨むような表情をしている恋が、左にいる。

なんか見ることができないので、前を向く。

ああ、俺は前しか見えないぜ……。

こんなことになったのは今から数十分前のことだった……。

数十分前。

「お、誰か来たみたいだ」

俺は玄関に向かい、ドアを開けた。

「センパイ！！ 元気ですか！？ 風邪ひいたと聞いてお見舞いに来ました」

「げ」

「人の顔を見るなり『げ』とは失礼ですよ、先輩！！」

苦手な後輩がいらっしやいました！。

いや、かなり良い奴なんだけどさ……。

苦手なだけであって、嫌いなわけではない。

むしろ、好意を抱いている。

抱いてはいるんだけどさ……。

押しが強すぎて苦手なんだよ……、まあ悪い奴ではないんだけどさ。

「いや、俺もう風邪治ったんだけど……」

「えー、本当ですか？」

俺の顔を覗き込んだ恋。

何か気まずいので俺は目をそらす。

かまわず、追いかけてくる恋の目線。

「あー！！ お前の後ろにガチムチのお兄さんが！！」

「いたらびっくりですよー！！」

ち、引つかからなかった!!

「あー!! 後ろにメリーさんが!!」

「それこそいたら驚きですよ!!」

ち、引つかからない!!

「じゃ、先輩。上がりますよ」

「お帰りくだされ!! お帰りくだされ!! メリー様!!」

「だから後ろには誰もいませんよ!!」

.....ちくしょー。

あがつてきちゃったよ.....。

諦めるしかないのか.....。

俺は恋が上がっていくのをただ見つめることしかできなかった。

〔智花視点〕

第一印象は、すごく良かった。

でも、良すぎてちょっと嫌かも……。

「私、秀明先輩の後輩の川澄かわすみれん恋です。よろしくお願いします」

ニツコリと微笑んだ恋さん。

「あつ、こちらこそ」

私も軽く頭を下げる。

可愛い人だな……。

「あの一、先輩は？」

「お兄ちゃんなら、あそこに……」

体の震えが止まらない模様です。

ガタガタ、という音が直に聞こえます。

……………あのお兄ちゃんがあそこまで怯えるなんて、恋さんはどんな人なんだろう？

「お兄ちゃん。もしかして、恋さんのこと嫌い？」

私はこっそりと尋ねてみた。

「いや、そうじゃないけど……」

少し気まずそうな表情をするお兄ちゃん。

「ただ、ちょっと押しが強すぎるんだよね……」

「そうなんだ……」

まあ、そんな感じがする。

「とにかく、あがってきちゃったし、一応おもてなししとくか」

そう言い、キッチンの方へ去っていった。

「あ、わたしも手伝いますよ」

「いや、大丈夫だ」

「そうですか」

恋さんはリビングの方に戻っていった。

「じゃあ、私が手伝うよ」

恋さんが手伝わないなら、私が!!

「台所クライシスを何回起こせば気が済むんですか？ 我が妹よ」

「……………すいませんでした」

やっぱり台所事情に関してはお兄ちゃんに任せよう…………。

我ながら不甲斐ない…………。

とりあえず、恋さんの相手をするため、私もリビングに戻った。

〈秀明視点〉

「さてと…………」

一応、マカロンを作ってみることにした。

まあ、作っている途中に来ただけどさ。

「そういや、アイツが俺んちに来るのって初めてだな……」

そんなことを呟きながら、マカロンをオープンに入れる。

焼きあがるまで時間あるし、リビングに戻って休むかな。

俺は、恋と智花がいるであろうリビングに向かった。

「誰か……！！ 助けて……！！」

「可愛いよ。智花ちゃん」

「キャッ……！ む、胸……」

「このちっちゃいのも、また可愛いよ……。はあはあ」

「ああ……。耳たぶはダメ……。……んあっ」

「下の方も、いってみる？」

「って、ゴルアアア！！」

ちょうど持っていたお盆を恋に投げつけた。

「ゴフッ！！」

きゅうしょにあたった！！

恋はたおれた！！

「まったく、この節操のなさな犯罪だな……」

これがあるから、苦手なんだよな……。

ってか、ユリユリな展開はやめてください。

耐えきれないから。

……主に下半身が。

いや、もちろん智花が犯されるのも耐えきれないけどね!!

「大丈夫だったか？」

「うん。ありがとう、お兄ちゃん」

頬を軽く紅潮させ息も荒い智花は、床にぐでーんとしている。

「まったく。こんななるまで智花を犯すなんて……」

恋の頭を軽く小突く。

「イタッ」

頭を押さえる恋。

「まったく、ありえん奴だ」

俺は指先で、恋のこめかみ、人中、喉仏、眉間を突つつく。

「やめてください。さり気なく急所に当てないでください」

「いや、やめない」

だって楽しいし。

すると。

「もお……。先輩ったら」

俺の指を掴み、ニッコリ笑う。

「そんなに私の弱味を握りたいんですか？ 私の弱点は首筋です」

「いや、むしろそれは、せいかな……」

「……………先輩って、えっちいですね」

「お前には言われたくない……」

ちょっと大きな声を出してしまったが、恋は気にした様子もなく、
まだぐでーんとしている智花を愛で始めた。

「やっぱり智花ちゃん可愛い。下さい」

あ、智花が軽く涙目に。

「あげないよ」

「そこを何とか……」

「だが断る」

その時、ようやくオープンのタイマーが鳴った。

「お、出来たみたいだ」

俺はキッチンへと向かった。

〈智花視点〉

「あーあ、先輩が行っちゃった」

つまらなさそうに恋さんはキッチンの方を眺めていた。

「智花ちゃん」

「は、はいっ!？」

またあんなことやこんなことを……。

とっさに身構える。

「いや、もう襲いませんから」

苦笑いする恋さん。

「そ、そうですね……」

あ、怪しい……。

なんかお兄ちゃんが苦手なものも分かる気がする。

でも、お兄ちゃんと恋さんって本当に仲がいいよね……。

もしかして、好きなのかな……？

「智花ちゃん。先輩って、料理できるの？」

「えっ、あの。まあ、出来ますね」

「そつには見えないけどね」

ニヤニヤしながら、お兄ちゃんを見つめる恋さん。

「他にも、掃除とか洗濯とかもやってくれます。私たち姉妹は何も出来ないから……」

言っててへこんできた……、うう……。

本当に、お兄ちゃんがいなかったら私たち何も出来ないような気がする。

「ま、まあ智花ちゃん。気を落とさずに」

「……………はい」

すると、恋さんが私の頭を撫で始めた。

「あの、恋さん」

「何？」

「もしかして、お兄ちゃんのこと、好きですか？」

……………「って、私何を聞いちゃってんの!？」

「ええ。わたしは先輩のこと、大好きですよ」

包み隠さないで、満面の笑みで返答した。

「そ、そうなんですか……」

何かショックだな……。

「もしかして、智花ちゃん。先輩のこと好きなのかな？」

「うええ！？」

いきなりでびつくりした！！

まさかこのタイミングで！？

「えっと、その。あの……」

しどろもどろな言葉でしか返せない私。

「そう、やっぱり好きなんだね」

「はい……」

恥ずかしいな、もう。

「……恋の敵が、現れた。わたし、絶対に負けない」

え、なんか今変なことを聞いたような……。

「それにしても、絶対先輩って鈍いよね。こんなにも愛している人がいるのに」

「確かにそうですね!!」

「まったく、気づいてくれないと寂しくて死んじゃうって」

「ウサギかなんかですか……」

「そういえば、先輩となんか事件みたいなことあった？」

なぜこのタイミングで!？

まあ、言っちゃうけど。

ちよつと、お兄ちゃんの鈍さを改めて思い返すと、腹が立って仕方ないよ。

「そういえば、この前なんかお兄ちゃん、私の下着にあんなことやこんなことを」

まあ、風邪を引いてた時の話だけ。

「うわ……。先輩って意外と……」

「考えてみると、最低ですよね……」

そんな会話を交わしていると、マカロンを持ってきたお兄ちゃんがリビングに戻ってきた。

「はい、出来たぞ……。……って、この空気は何なんだ……?」

（秀明視点）

そして、今に至ります。

後に恋から聞いてみたところ、俺の文句で盛り上がったらしい。

てなわけで、今のこの状況。

前しか見れなかった俺は、左右から攻撃を受けて、沈没してしまった。

やっぱり、俺は悪い子だったのね……………。

とりあえず、次から次へと降り注いでくる罵声と暴力から身を守るため、意識をシャットダウンさせた俺であった。

お兄ちゃんの後輩が、遂に……！！
by 智花（後書き）

誰かがポイントを入れてくれました。

嬉しいですね。

あと、これからはなるべくミスの無いようにしていきたいです。

今後とも、よろしくお願いします。

どうしたもんかな…… **b y 秀明（前書き）**

何度も何度もすみません。
ミスばかりで……

バッニ↓バッサン

実子↓連れ子

に変更しました。

どうしたもんかな…… by 秀明

（秀明視点）

「ただいまー」

どうやら俺が一番最初に帰ってきたみたいだ。

まあ、奨学会で早く帰れたから当然なんだけど。

でも暇だな……。――。

智花はいつも通りに授業あるし、美代は大学行ってるし……。

一人で出来る暇つぶし……。

ケーキでも作るか。

……どこからか乙女チックとか聞こえた気がするけど、気にしない。

俺は台所に向かった。

数時間後。

「……………調子に乗りすぎた」

ウェディングケーキ並みのゴージャスなケーキができてしまった。

我ながら驚きを隠しきれない。

アンネも学校だし、俺のクラスメートにはあげる気にはならないし……。

そーいや、朝あんま食ってないからちよつと腹が減ったところだ。

まあ、一人で食う分では無いけどさ……。

おっし、いっちょ食ってみるか!!

数時間後。

「俺には、無理だ……」

さすがにあの量を一人で食うのは無理がある。

「味の、脱線事故だ……」

甘さが口の中を跋扈はつこしています。

気持ち悪い、吐きそうだ……。

とりあえず、水を飲み干し、ケーキを胃に流し込む。

ソファーに倒れ込んだ俺。

「まだ十時半か……」

エロゲでもやろっかな……。

……いや、朝からやっちまうのか、俺。

……。

うん、止めよう！

勉強する気にはならないし、家は片づいちゃってるし、やる事が無い。

やっべー、暇すぎる！！

………一人遊びでもするか。

「くっ、なんて奴だ……！！　こいつらを倒すことなんてできるのか……！？」

「ふはは、貴様なんぞに倒せるはずが無かるっ」

「クソっ！？　なんだこの甘い匂いは！？」

「バニラエッセンスの匂いだ。耐えられるかな？　人間ごときに」

「これくらい……！！」

「ほう、少しはやるようだな」

「人間をなめんな！！」

「愚かな……、まだ足掻くか。私を作り出したのは貴様ら人間のおろかな欲望。幾千の人間の欲望が、たった一人の人間の勇氣に負けるはずかないだろう」

「さあ、分からないぜ？」

「何をする気だ？」

「俺にはウォーター様が付いてる！！　テメエなんざ流し込んでやる！！」

「くっ、何故……!!」

「アンタは、俺が作り出した存在、『ケーキ』だ。つまり、俺の子供みたいなもんだ。弱点くらい、簡単に分かるぜ」

「なめるな!! 小僧!!」

「俺は……、お前を倒す!!」

その時。

インターホンが鳴った。

あーあ、いいところだったのに……。

ひとり二役の何か化け物と闘う物語。

まったく、誰だよ!!

エアーをリーディングしやがれ！！

俺はドアを開けた。

「これはどうも」

……………一番会いたくない奴が出てきやがった。

きちつとした服装に、清潔感溢れる身だしなみをした男性。

普通なら好印象を抱くはずだが、俺は微塵にも抱かなかった。

俺はこの男を知ってる。

「……………どちら様ですか？」

だが、トゲが入った声で俺はそう問いかけた。

「私ですか？ 私は智花の実の父、茂樹しげきと申します。まあ、ご存知かと思いますが」

皮肉が通じない奴だ、まったく。

「何の用ですか？ 母さんなら出掛けてますよ」

どうせ、よりを戻すつもりだ。

うまくいくわけがない。

「いえ、用があるのは智花の方です」

「は？」

素っ頓狂な声を出してしまった俺。

「先日、美代さんに伝えるように申したのですが」

……美代ねえ。

だから、あんな思い詰めた表情してたのか。

「そうですか……」

「そうなんです」

……嫌な予感しかない。

『予感』であってくれ……。

しかし、無情にも、残酷な言葉が出てきた。

「智花を、引き取りに来ました」

「……何だよ？」

「そういう約束でしたから」

「……どんな約束だよ？」

「優花に聞いて頂ければ、分かります」

優花、は俺たちの母親の名前。

「……………脅してるのか？ 母さんを」

すると、眉が少し動いた。

「心外ですね。そんなことを言われるのは」

悲しそうに顔を伏せるかつての父親、茂樹。

美代ねえと俺は、茂樹とは血が繋がっていない。

智花は茂樹の連れ子だ。

さらにいうと、美代ねえと俺は直接的には血の繋がりが無い。

それぞれ、父親が違う。

茂樹は、三人目の父親。

そして、母さんはバツイチならぬ、バツ二でもけバツサン。

さらに、一人目と二人目の父親は、亡くなっている。

……これは、清川家に伝わるジンクス。

清川家に生まれた人間は、結ばれた相手が何らかの要因で亡くなってしまう。

ちなみに、茂樹は離婚したため、俺たちは母さんの旧姓と同じ、清川。

「智花は今どこに？」

「出掛けてるよ。しばらく帰って来ない」

「そうですか、では次の機会に……」

そう言い残し、茂樹は帰って行こうとした。

「待てよ、何で今更引き取りにくるんだよ?」

それを、俺は止める。

「理由ならありますよ」

「じゃあ何だよ?」

「分かっていると思いますよ」

ヤレヤレ、といった感じで首を振った茂樹。

「……………」

まさか、血が繋がっていないからとか?

いや、そんなのは理由にならない。

「では、失礼します」

そう言い、彼は去っていった。

「……………どうすりゃいいんだよ……………」

声にならない声が、小さく響いた。

〔智花視点〕

「ねえ、恋さん。最近お姉ちゃんの様子がおかしいんですけど……………。
何か知ってますか？」

帰り道、たまたま恋さんと遭ったので、途中まで一緒に帰ることに
した私たち二人は、最近様子のおかしいお姉ちゃんのことについて
話した。

「ううん。何も知りませんよ。でも、確かにちょっと様子がおかし
いですね……………」

「何かあったのかな……………」

お姉ちゃんの様子が変。

話しかけても上の空だし、なんかひとりになりたがるし……。

家族なんだし、話してくれたいのに……。

少しもやもやとした気持ちを抱えながら、私は帰路を急いだ。

数十分後。

「ただいま」

「……………お帰り」

……………あれ？

「どうしたの？ お兄ちゃん。元気ないよ？」

「ん、……………ちょっとね。色々あつてさ」

「何かあったの？」

「いや、大丈夫だよ。うん」

そうお兄ちゃんは言ったけど、大丈夫には思えなかった。

お兄ちゃんの様子までおかしくなった。

……………私は、どうすればいいのかな？

どうしたもんな…… by 秀明（後書き）

引き続き、お楽しみください。

温泉はいかが？ 先輩 by 恋（前書き）

俺も後輩キャラと温泉行きたい！！

……まあ、無理ですけどね。

温泉はいかが？ 先輩 by 恋

（秀明視点）

「で、相談ってなんだよ？」

「……じゃ、言いたくないです」

さつきからその一点張りだ。

「気になるから早く言えよ」

「旅館に着いたら、言います」

恋は意地悪そうに笑って、人差し指を口に当てた。

そして足早に坂を登っていった。

まったく……、何があったのかくらい言ってくれたっていいのにな……。

一泊分の荷物を背負い、俺も恋の後を追いかけた。

く秀明視点く

休日だというのに、人があまりいなかった。

落ちぶれている、というわけでもなく、普通に良さげな感じがする。

恋は手慣れた感じで、チェックインを済ました。

「先輩、部屋は408号室ですよ」

「ああ」

階段を登り、部屋を目指す。

「そつえば、先輩。ここって何で有名か知ってますか？」

「知らんがな」

「温泉ですよ」

「そうか、なら俺は部屋のシャワールームでも使おうかな」

「な、何ですか!？」

「絶対、お前覗いてくるだろ」

「……………そんなこと、しませんよ?」

「なんだよ、その間は」

「そんなことより、着きましたよ」

恋が鍵を取り出し、先に歩いてた俺にそれを渡してきた。

俺はそれを受け取り、鍵穴に差し込む。

そしてドアを開けた。

風情のある景色が広がっていて、落ち着く。

恋のセンスもなかなかだな。

まあ、口が裂けても言わないけどな。

「どうですか？ 先輩」

ニコニコしながら俺を見つめる恋。

「……………ま、それなりかな」

「えー、先輩好みの部屋にしたのになー……………」

何で俺の好み分かるんだよ…………。

「せっかいですから、温泉行きましょうよ」
「ゆ」

恋は俺の手を引き、温泉に行かせようと促してきた。

「その前に、一つ質問がある」

「？」

俺は、部屋に入ってからずっと思ったことを口にした。

「部屋はこれだけ？」

「はい、そうですけど。何か問題あります？」

「ありまくるよー!!」

「二つも部屋とつたらもったいないじゃないですか」

「若い男女だけが旅館で寝泊まりしてるだけでもヤバいのにな、同じ部屋はマズいだろー!!」

「いえいえ。一部屋に敷かれている、一つの布団に、二人の男女が入るんですよ……。官能的じゃないですか」

「お前は危ない！！ 危なすぎる！！」

相変わらず変態だな！！ この後輩は！！

まったく！！ 変態が服着て歩いてるようなもんだよ！！

……あれ？ 服着てたら変態じゃないような……？

「先輩、こっちですよ」

「うーん……」

あんまり気が進まない。

絶対なんかしてくる。

なんらかの犯罪行為を仕掛けてくるに違いない。

「先輩？」

「一応、聞くぞ。男女別か？」

「当然ですよ。混浴は家族風呂だけです」

「そうか、ならいい」

男女別なら襲われることはないな……。

俺たちは更衣室に向かった。

（秀明視点）

温泉は、ほとんど誰もいなかった。

もちろん、体をちゃんと洗うつもりだ。

それくらい、最低限のマナー。

最近それが守れない輩が増えてしまっている。

まったく、けしからん!!

「あ、石けんが無い」

……どうしたものか。

「センパイ。いますかー？」

恋の声がした。

「……………お前な、人いたら恥ずかしいだろうが」

「いたら、ですからいませんよね？」

「まあ、ほとんどいないけどさ。……………二、三人くらいかな」

「こっちもそんな感じです」

「そっか。ところで石けんある？」

「ありますよ。なげますね」

すると、石けんが一個、空から降ってきた。

「お、サンキュー」

「わたしの使い古しですけどねー」

「……………恋の、か」

「先輩、えっちいこと考えてますね？」

「……………気のせいだー!!」

「今の間は何ですか？」

「ああつ、もう何でもないよ!!」

なんか来ていたオッサンたちに「この男……、なんて奴だ……」みたいな眼差しを向けられたので、いそいそと体を洗い流し、その視線から逃げるように俺は湯に浸かった。

真ん中にいるのは恥ずかしいので端っこの壁に背中を預ける。

「ふいふ。極楽極楽」

思わず声が漏れた。

「あ、先輩も入りましたか」

恋の声が後ろから聞こえた。

「まあな」

「ちなみに、わたしは先輩のすぐ後ろにいますよ」

「壁を挟んで、だろ？」

「まあ、そうですね」

「ふーん。……………」

「先輩？ 多感な時期なのは分かりますけど……。公衆の」

「むしろお前がマズいからな」

「ヒドいですよ。先輩……………」

「フリイフリイ。ところで、相談って何なんだよ？」

俺は今、それが一番知りたい。

「先輩……。じゃあ、言いますよ」

俺はその言葉を待つ。

「先輩、何か思い詰めていませんか？」

ギクリ、とした。

まさかバレていたとは……。

「先輩って、意外に隠し事苦手ですよね」

そう恋はクスクスと笑った。

「うるせっ」

気恥ずかしくなったので、そう言い返した。

「何かあったんですか？」

「……………」

あまり、言いたくないことだ。

家庭の事情、というヤツだからそう簡単に言えるわけないけれど。

「……………長く、なるけど。聞くか？」

「はい!!」

俺は、今まであったことを話し始めた。

数分後。

「……………そんなことがあったんですか」

「まあ、な」

「大変ですね」

「なあ、恋。俺はどうすればいいと思う？」

分からない。

俺には分からない。

「ん……。そうですね……」

彼女は唸った。

考えているみたいだ。

「先輩は、どうしたいですか？」

「俺は……、みんなと一緒にいたい」

いつかは離れ離れになってしまうは分かる。

分かっているんだ。

でも、離れたくない。

「なら、一緒にいられるようにその人に言ったらいいじゃないですか？」

「……そうだな。そうできればいいよな」

「イエイエ」

本当に、そうできれば、いいよな……。

その後、色々話し合っ大分心が楽になった。

普段、恋に何かありがたいことをされても、なんかむずかしくて礼なんて言えなかったけど、今回は割とすんなり「ありがとう」を言えた。

………せっかく恋に連れられてここまで来たんだし、ゆっくりしていいのかな。

一時間後。

「あー、すっきりしたー」

タオルで頭を拭きながら俺は風呂場から出た。

目の前にはぐったりとした恋が長椅子に横たわっていました。

「つて!! どうした!？」

へんじがない、ただのしかばね……………。

「なんですかあ……………」

では無かった。

「こんなぐでんぐでんになって…………。いったい誰にやられた!？」

チクショウ!! 俺の可愛い（見た目が）後輩にこんなことをする
なんて…………!!

「先輩です。犯人は……………」

そう言い残し、恋は息絶えた。

「恋!!」

俺の叫び声が旅館に響き渡ったのであった。

それから数分後。

屍になった恋を何とかして抱き上げて部屋まで運んできた。

恋を敷いてあった布団に寝かせて、氷水の入ったビニール袋を額にのせた。

「まったく……。こんななるまで入るなんて、お前はアホか」

「先輩が長湯すぎるんですよ」

「まあ、そうかもしれないけどさ」

でも美容にいいから恋にとってもいいはずだ。

ぐったりはしてるけど、肌の艶はすごくいい。

「先輩、ここまで運んできてくれたんですか？」

「まあ、そうだな」

「……重かったですか？」

「いや、全然」

この前の屋根突き破り事件の時に処分したグッズたちに比べりや大分軽かった。

まあ、言わないけど。

「よかった……」

ほっ、と一息ついた恋。

「ねえ、先輩」

「何だ？」

「せっかくですし、涼みに行きませんか？」

「ん、そうだな」

すっかり復活した恋と一緒に俺たちはその場を後にした。

一時間後。

「ねー、恋さん」

「何ですか、先輩」

「いくら俺に卓球で勝ったからって、これは飲みすぎ食いすぎです」

「!!」

軽く五千円分くらい飲食している。

「あ、これはこれはスイマセン」

「謝る気ゼロだな!!」

「まあまあ先輩も。ささ、グイッと」

「お前の飲みかけなんか飲むか!!」

「えー、飲みたいくせにー」

ケラケラと笑う恋。

「ささ、嫌な予感とかそういうのは忘れて、グイッと」

「俺の口元に寄せるな!!」

……まったく。

やっぱ、恋は凄いな。

だいぶ、気が楽になった。

「ありがとな、恋」

小さく、誰にも聞こえないように、俺はそう言った。

……まずは、美代ねえと智花に言わないとな。

ちなみに、部屋に戻った後、軽く貞操の危機にあったが、それは思い出したくないので、美代ねえに一発殴ってもらって、記憶を抹消してもらおうと思った俺であった。

温泉はいかが？ 先輩 by 恋（後書き）

あと少しで終了します。

さて、次はどうしようかな……？

あたしたちにできること by 美代（前書き）

さて、始まります。

あたしたちにできること by 美代

〔智花視点〕

「ねえ、アンネさん」

「はい、なんでしょう?」

アンネリーゼさん、と呼ぶと彼女はちょっと怒るので、アンネさんと、私は呼んでいる。

本人はあまり可愛くないから嫌だと言ってる。

私はあまり気にしないのにな……。

それはともかく。

「最近、お姉ちゃんとお兄ちゃんの様子が変なの。何かあったか分かる?」

「いえ、特には……。でも、前に天井を突き破った事件がありました

「だから、それかも知れませんか？」

「いや、それは違うと思う……」

確かにアレは酷かったけど……。

「何で二人とも私に相談してくれないのかな……？」

思わず大きなため息が出た。

「心配をかけたくないからだ、アンネは思います」

「その方が余計心配するよ……」

大きくため息をつく。

「きっと話してくれますよ。二人なら」

「だいたいけど……」

「いつそのこと、逆にこちら側から聞いてみたらいかがですか？」

「うん、そうしてみるよ」

ふと、空を見上げた。

どんよりと曇った空。

何故か憂鬱な気分になされた。

……悪いことが起きないやいいけどね。

く美代視点く

……さて、どうしたものか。

秀明くんに相談するべきか……？

とりあえず、目の前にいるから、話しかけてみようか……。

「ねえ、秀明くん」

「ん、何？」

雑誌から目を離さずに答える秀明くん。

「今日のご飯は？」

「ん？ マグロ丼にするよ」

「そう」

……………ダメだ。

とてもじゃないけど、言えない。

でも、いつかは言わなきゃいけないんだ。

今、言うしかない。

「秀明くん？ ちょっと聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「いいけど。どうしたのさ、改まって」

言うんだ、言うしかないんだ。

「……………茂樹が、来たんだ」

かつて父親だった人の名前を、私は口にする。

「ああ、知ってるよ」

「……………知ってた？」

予想外の言葉が出てきた。

「つい三日前に、ね。ウチに来た」

「そうなんだ……。何て言ってた？」

「もうすぐ引き取るから、って」

「……………そう」

「どうするっ」

「あたしは、どうしようもないよ……………」

「そのこと何だけどさ」

「何？」

「アイツに、俺たち家族がみんな一緒にいられるように言ってみないか？」

……………その考えがあつたか。

「……………それ、いいかも」

その後、あたしは秀明くんの意見に耳を傾けながら、今後どうする

かを話し合った。

「で、問題は智花に何て言うかだけどさ」

「うん、言わないとね」

……あたしたちは、家族だ。

誰かが介入して、あたしたちの幸せを奪う権利なんて誰にも無いんだ。

〈智花視点〉

「ただいま」

聞いてみよう。

二人が何を考えているのかを。

「智花ちゃん。話したいことがあるんだ」

「お姉ちゃん？」

迷いの色を瞳に浮かべながら、私を見つめてきた。

「お母さんが、結婚と離婚を繰り返したことは、知ってるよね？」

「うん……………」

それが、何か関係あるのだろうか？

「智花ちゃんを、引き取りに来たんだ」

「……………え？」

何、それ？

「茂樹が…………、君の本当のお父さんが引き取りに来たんだ」

「何で……………?」

「分からない」

「嫌だよ……、私」

自分の声が震えているのが、すごく分かる。

「あたしだって、嫌だよ……」

うつむくお姉ちゃん。

「でも、きつとなんとかなる。あたしが……、いや、あたしたちが絶対になんとかしてみせる」

「お姉ちゃん……」

……そんな大変なことがあるなら、早く言ってくれればよかったのに。

でも、話してくれた。

それが、すごく嬉しかった。

……私がこの家に来たのは今から八年くらい前のことだった。

お姉ちゃんたちが嫌ってる茂樹が、お姉ちゃんたちのお母さんである優花と同居を始めた。

まだ、再婚はしてないけど。

……最初は怖かった。

知らない女性に、自分より背の高いお兄ちゃんとお姉ちゃん。

そして、彼ら三人から見て私は連れ子。

虐められるかと思った。

けど、違った。

お姉ちゃんもお兄ちゃんも優しくしてくれたし、お義母さんも面倒を見てくれた。

仕事で、お父さんが帰ってこなくなったのは寂しかったけど、みんながいてくれたから辛くはなかった。

時々、お父さんに会いたくなっただけど、全然気にしなくなった。

……だからなのかな。

お父さんに引き取られるのが嫌なわけが。

「……私はみんなと一緒にいたい」

「あたしもだよ。なんとかして、茂樹に頼んでみよう」

私は、ただそれに黙って頷いた。

〈秀明視点〉

恋に言われた通り、連れて行かないようお願い出ればいい。

多分、説得には時間がかかる。

いかにして、説得するかが問題だ。

………ちつとも良い言葉が思い浮かんでこないのは悲しいが。

下手に考えるより、率直に伝えた方がいいかもしれないな。

なんとかして、茂樹から智花を守るんだ。

……でも、気がかりが残る。

茂樹って、そんなに悪い奴か？

小さい頃から美代ねえに「悪い奴」と教え続けられた。

今まで俺もそう思っていた。

でも、最近になってなぜかそうには思えなくなった。

むしろ、あの人も俺たちと同じ家族に思える。

もしかしたら、家族の一員になれたかもしれない。

……止めよう、こんなことを考えるのは。

今現在、茂樹は俺たちから智花を奪おうとする敵。

俺たちはそれらから守るんだ。

大切な、家族を。

あたしたちにできること b y 美代（後書き）

オチでしょうか……

誤字脱字等あればなんなりと

お父さん、と呼べる時（前書き）

さて、最終話です。

意外な展開かもしれません

お父さん、と呼べる時

（秀明視点）

あの時から、もう1ヶ月が経った。

今日は、アイツが来る。

ダメ元で言ってみるしかないな。

恋に言われた通りに。

ピンポーン。

「来たか……」

俺は玄関に向かった。

「こんにちは、秀明くん」

「……どうも」

美代ねえは智花にあのことを打ち明けたんだ。

俺は、茂樹を説得させる。

俺たちが一緒にいられるように。

「……智花は？」

「そのことなんだけどさ」

心拍数がどんどん上がっていく。

「………引き取るのは、止めてくれないか」

「どうしてですか？」

不思議そうに俺を見つめる茂樹。

「俺たちは家族なんだ。みんなとは一緒にいたい」

緊張で口の中が渴いている。

「……………で？」

「それだけだ。アンタになんか智花は連れて行かせない」

でも、それを悟られないように俺は強い口調で話す。

「……………そうですか」

はあ、と小さく茂樹はため息をついた。

「……………それでも、連れて行きます」

「っ……！ 何だよ……！」

思わず叫んでしまった。

「優花との約束、ですからね」

茂樹の顔色を見ることはできなかった。

うつむいていたから、どんな表情をしていたから分からない。

でも、声色からして弱さを感じた。

「……どんな、約束だよ？」

その約束とやらを、俺は聞こうとしている。

もしかしたら、聞くべきではないかもしれない。

でも、俺は聞きたい。

「……しょうがないですね。話すのでしょうか。ここでは何です
し」

とりあえず、リビングに入れた。

そして、椅子に座る。

とりあえず、で用意した紅茶を出した。

茂樹は「ありがとう」と一言。

「で、約束ってなんだよ？」

「金銭的な理由で困った時、一時的に智花を引き取る、という約束です」

「……………へ？」

ちよい待ち。

家庭的な理由とかじゃなくて？

再婚だの何だのじゃなくて？

「つてことは……」

……ヤバイ。

金銭的な理由で引き取られる原因について心当たりがありすぎる……！

「はい。優花が大変なことになったと……」

「スイマセン。俺が原因でした」

だつてさ……。

キッチンはあるな惨劇だし、調子に乗って高級食材使っちゃったし、俺の某グッズによる二階の崩落に、他にも心当たりがありすぎる……！

「優花もそう申ししていましたよ。秀明くんが大変なことをしでかした、と」

「……………えーと」

つてことは……………。

茂樹なんも悪くないじゃん！！

がつくりうなだれる俺。

「……………どうかしましたか？」

心配そうに見つめてくる茂樹。

「何かすいませんでしたーっ！！」

その時、俺は生まれて初めて全力で土下座をしたのであった。

〈美代視点〉

そこには、弟が全力で土下座しているという混沌とした風景が広がっていた。

「ちょ、何コレ！？」

秀明くんの側に近寄る。

「はは……。俺は凄くハズい勘違いをしていたみたいだ……」

力無く笑う秀明くん。

「茂樹さん。アンタいったい何をした!？」

「あ、いえ……。私もちよつと……」

やや困惑気味の茂樹。

「何があつたの？ 秀明くん」

とにかく、状況確認。

「ははは……。俺はとんでもない勘違い野郎だよ……」

「どゆこと?」

あたしがそう聞くと、秀明くんは一応話してくれた。

数分後。

……。

……。

……あるえ？

もしかして……？

「ってか、美代ねえ。全然あの人悪くないよね」

「だよね……。むしろあたしたちが悪いような……」

「だったら何で美代ねえは俺にあんなに文句を言ったのさ？」

「……………」

マズい。

悪の根元はあたしにある……。

秀明くんは茂樹の文句を言いまくってたし……。

ふと、昔のことを思い出した。

お母さんが茂樹と再婚すると聞いた時、ちょっとだけ不安を感じたけど、慣れなきゃいけないと思い、頑張って接した。

ホントに茂樹は良い人だった。

自分の実の子じゃないのに可愛がってくれた。

でも、ある日。

茂樹は家からいなくなってしまった。

お母さんに聞いてみると、

『お父さんはね、しばらく戻ってこないよ』

と言っていた。

今なら、仕事かなんかで帰って来れないと思えるけど……。

幼かったあたしは、そんな思考にはならなかった。

あたしたちを置いて、いや捨ててどこかに行ってしまったと思った。

それが、幼心を大きく傷つけた。

そして、彼の文句を言うようになった。

時々、帰ってくる時はあつたけど、彼への信頼は既に凍り付いていた。

そして、そんなある日。

お母さんと茂樹は大喧嘩をした。

………今でも、思い出しただけでも怖い。

そしてこの時、確信に変わった。

………茂樹は、あたしたちのことを愛していなかったんだ、と。

「美代ねえ………？」

「ねえ、秀明くん。あたしの話、聞いてくれる？」

「いいけど……。何？」

あたしは、昔のことを詰まりながらも話した。

茂樹のこと、家族のこと、今までのことを、話した。

すると。

「……美代ねえ。聞くと、明らかに美代ねえが悪いような」

秀明くんに睨めつけられる。

ははは、冷や汗が止まらない。

「……………あたしも、そんな気がしてきたよ」

「てか、俺の茂樹嫌いは美代ねえが原因な気がするぞ……………」

「でも、それなら喧嘩はどうなってんの？」

あたしたち二人は茂樹の方へ振り返る。

「……………あ、そう言えば」

「茂樹さん！！ アンタいったい何をした！？」

「え……………」

気まずそうに目を背ける。

「それならわたしが言っわ」

いつの間にか茂樹の隣に座り、お茶をすすっていたお母さん、優花がそこにいた。

「……………いつの間に！？」

思わず二人で突っ込んでしまった。

「あれは雨の降る日だった……………」

「何か語り出したよ……」

ヤレヤレ、と呟く智花ちゃん。

……つて！！

「あれ、いつの間に!？」

今度はあたしの隣に智花ちゃんがり、お菓子を口に使っていた。

さっきまで部屋にいたのに……。

「待ってろって言っただろ、智花」

ため息をつく秀明くん。

「だって、二人が心配だったし……」

「……まあ、この際いいんだけどさ」

あたしと秀明ちゃんと智花ちゃん。

三人はお母さんの話に聞き入った。

「久しぶりに帰ってきた茂樹さんと一服していた……」

遠くを見るような目。

やっぱり、なにかあったのかもしれない。

「その時、茂樹さんが買ってきてくれたお菓子に問題があった……」

あるえ？

何か下らないオチが見えそうな……。

「どら焼きがこしあんじゃなかった!!」

「そんな理由で喧嘩したの!?!」

思わず大きな声を出してしまった。

「母さん。……………」

冷たい目で彼女を見つめる秀明くん。

「だって粒あんだったんだよ!!」

「知るかつ!!」

そんなことでトラウマになるくらいの喧嘩はしないでほしい!!

「でも茂樹さんは粒あん派だった!!」

「マジでどうでもいい!!」

「そして今に至る」

「」「」どうしてこうなった!?!」「」

あたし、秀明くん、智花ちゃん、同時に叫び、お母さんにこしあんのどら焼きを投げ出した。

茂樹は前回の轍を踏まないようにこしあんを買ってきたらしい。

……どうでもいいけど。

それからはしっちゃんかめっちゃんかで、どら焼きが空を舞ったり二階が崩落したり、しまいにはアンネちゃんや恋ちゃんまでやって来たりと、もう何だかカオスだった。

でも。

それでも……。

「粒あんのどら焼きマジあり得ないから!!」

「いやいや、これこしあんだし！！　　ってか、俺の持つてくなよ！！」

「だからって私を持って行かないでよ！！　お兄ちゃん！！」

「だからって、智花ちゃん！！　あたしを持って行こうとしないで！！」

「普通に人数分あるんですけど……。気付いてください」

「これがあのどら焼き……。アンネ、初めて食べます！！」

「ってこら！！　俺の持つてくなし！！　　何でみんな俺の持つてくんだよ！！」

「先輩、じゃあわたしが食べさせてあげます！！　　口移しで！！」

「こっち来んな！！　　変態！！」

「おやおや、スミに置けないねえ。秀明くん」

「お兄ちゃん、私も……。いいかな？」

「わたしが！！ 智花ちゃんのを食べさ」

「いやいや、俺に対して言っただってば！！」

「スミに置けませんね」

「ちよつ、茂樹まで！！」

「置けませんね」

「アンネちゃんまで！！」

騒がしいことこの上ない。

でも、いつの間にやらみんな笑顔になっていた。

そして、気づいたらもう夜遅くまで回っていた……。

〔智花視点〕

「あの……、茂樹さん」

「どうかしましたか？」

どうやらお姉ちゃんとお父さんが話しているようだ。

私はこっそりとその場をうかがった。

「ごめんなさい。今まで勘違いしていて……」

俯いたままのお姉ちゃん。

こんなに大人しいお姉ちゃんも珍しいな。

すると、お父さんはお茶をすすり

「いいんですよ、気にしなくて。秀明くんもさっき謝ってきましたし」

お兄ちゃんも謝ったんだ……。

「……私も家庭を顧みず、仕事ばかりしていましたから。こうなつてしまったのは当然の報いでしょう」

と言い、にっこりと笑った。

「あたし、とんでもないことをしてしまった。……あの時に戻れるなら、もう一度やり直したい……」

「今からでも大丈夫ですよ」

「えっ？」

「一度できてしまった溝は、そう簡単には戻せません。少しずつ、少しずつ埋めていくしかありません。でも、今日一日で大分埋まったんじゃないですか？」

「……………そうかもしれないね」

静かに笑うお姉ちゃん。

「智花のことですが、連れて行くのは止めます」

「いいよ、その話は」

「そうですね……。もう時間ですし、帰ります」

徐に立ち上がり帰る支度をするお父さん。

そして、数分で支度を済ませ、玄関に着いた。

気付いたのか、家族のみんなが集まっていた。

「では、またいつか」

名残惜しそうに背を向けた。

「「「お父さん」「」」

私と、お兄ちゃんと、お姉ちゃん、同時にそう呼んだ。

お兄ちゃんは恥ずかしいのか、どこか別なところを見つめている。

お姉ちゃんも同じなのか、俯いている。

そして、ピタリと足を止めるお父さん。

私は、みんなを代表して、あの言葉を言おう。

今まで素直に呼べなかった二人が、言いたい言葉を。

ううん、みんなで言わないとね。

「「「いつてらっしゃい」「」」

お父さんというと。

振り返らず、その場に立ち尽くし、ただどちよつとだけこつちを振

り向いてこう言った。

「いってきます」

いろんなことがあったけど。

一度は亀裂が入ってしまったけど。

そんなものは大したものじゃない。

今、乗り越えたんだから。

今なら、きつとどんなことだって頑張れる。

だって私たちは、家族なんだから。

とある閑静な住宅街に住む、とある家族。

その家庭から笑顔と笑い声が絶えることはない。

元気で活発な長女に、明るくユーモア溢れる長男に、大人しく可愛らしい次女。

優しくて丁寧な父親に、ちょっと子どもっぽいけど面白い母親。

そんな家族が、楽しく日常を過ごしている。

「ヤッバイ！！ バイトに遅刻する！！」

「美代ねえ、いまだ一人で起きれないのかよ！！」

「お兄ちゃん、これどうやって焼くの？」

「ちよっ、また炎上してるわよ！！ 早く消しなさい！！」

「また出費が凄いことになりますね……」

清川家は今日も明るい。

お父さん、と呼べる時（後書き）

自分で書いときながらですが。
なんというオチ（笑）

12話という短い間でしたが、楽しんで頂けましたでしょうか？
楽しんで頂けたなら幸いです。

ちなみに今、別な小説を書いています。

清川家の人間がでるかも知れません。

……ま、そこは楽しみということ。

ここまで読んで頂いた方に、最高の感謝を。

守りたい…… by 秀明（前書き）

ぐああっ！！

復活してみたよ

守りたい…… by 秀明

〈秀明視点〉

「俺は決めた。家族を守るような人間になる」

なんか、今の俺、かつこよくね？

「童貞も守れないような人間がそんなことを言うなんて……、先輩
おこがましいですよ」

ズバツと恋に返された。

見事なツバメ返し、ありがとうございます。

「いやいや、俺はまだ純粋な童貞だから……」

「……………ププツ」

「笑うなよ……」

女の後輩に笑われた……。

なんかシヨック……

「え、マジ……？ 童貞……？ キモ……」

元ネタは分かってる。

しかも、淫乱魔女、恋が言ってるんだ。

でも、なんかやっぱりシヨック……

「童貞が許されるのは、小学せ」

「ストオオオOPP!!」

やっぱりこの後輩ヤダ!!

「何ですか、先輩？」

「……もういい、なにも言つまい」

何でこうなったんだっけか？

ああ、もう訳わかんねえ……!!

(今から1時間前)

「もしもし？」

「あ、先輩ですか？ わたしです」

ガチャン!!

俺は即座に電話を切った。

電話番号教えてないのに、何で知ってんだよ……アイツ。
やっぱり、ストーカーなのか!?

「どうしたの、お兄ちゃん？」

「ああ、智花か……。恋がさ……」

「恋さんかどうかしたんですか？」

「電話番号教えてないのに電話かけてきた……」

「そ、それはまた……」

俺は大きくため息をついた。

「ちょっと、俺隠れる。アイツが来たら俺のこと出かけてるって言うって」

「う、うん。分かった」

とりあえず、クローゼットの中に隠れた。

ピンポン。

やはり、来たか……。

「あれ、先輩は？」

恋の声だ。

「今、お兄ちゃんはコンビに……」

ナイス！！

我が妹よ！！

「そんなことよりわたしといいことしない？」

妖艶な声をし、なんかヤバそうな恋……。

「え……、たつ、助けて!!」

悲痛な智花の声……。

「なあにしとるんじゃあああ!!」

耐えきれない!!

妹が後輩に犯されるなんて!!

「あ、先輩」

「……あ」

と、言うわけで今に至る。

「って言うか、なんでお前が……」

「デートしたかったんですよ、先輩と」

「……ったく」

恋は凄い勢いでパフェを食している。
バキューム・恋と名付けよう。

「お前、これで八杯目だぞ……。お金大丈夫か？」

「ええ、大丈夫ですよ。だって先輩の奢りですから」

「おい、待てい！！」

やっぱり、そういうことなのか……！！

ああ、貴重な小遣いが……！！

うなだれていると、恋が。

チュツ。

俺の頬にキスしてきた。

ちなみに、恋は性格こそアレな感じだが、見た目は美少女だ。
周りから見るとバカップルにしか思われない。

でも、そんなに良いもんじゃないですよ、皆さん……。

非リア充の方々、そんな目で見ないで……。

「えへへ」

いたずらっぽく笑う恋。

そんな恋に、俺は一言。

「俺がパフェ奢って、お前が俺にキスして、まるで援交だな……」

「あはは。確かにそうですね」

そんなにおかしいですか、恋さん。
俺がムスツとしてると。

「もしかして、ほっぺたじゃ飽き足りませんか？ 先輩」

「……んなこと……ない」

すみません、ちょっとだけ期待していた自分がいました。
ああ、死にたい。

「じゃあ……、今度は膝裏にします」

「待てい！！ 何かアブノーマルだ！！却下！！」

「じゃあ、おへそ……」

「お前はそのまま勢いで下の方にまでキスしそうだ！！ 却下！！」

「それだったら、水着の早着替えなんていかがですか？」

「キスですら無くなった！！ てか誰得！！ 却下！！ ってか、
何だよ！！ この流れ！！」

「だって先輩。膝裏、おへそときたら水着早着替が定石じゃないで
すか！！」

「そうか。じゃあ、そのお前のふざけた幻想をブチ殺す」

「や、優しくしてくださいね……」

「安心しろ。カミクダイテやる」

「そこはアマガミでしょう!! 先輩!!」

皆さん、お分かりでしょう?

こんな美少女、付き合いきれますか?

察したのか、周囲の攻撃的な視線が同情的な視線に変化した。
てか、同情するなら金をくれ。
こんなの、奢れるわけがない。

「……はあ」

「ため息すると、幸せが逃げますよ?」

「るせー、お前のせいだよ」

午後三時のファミレス。

流れてくるのはオーケストラの曲。

なんか恋の相手をしてると無駄に疲れるな……。
眠たくなってきた。

「なあ、恋」

あー、眠い。

変なこと言いそうなくらい、眠いぞ……。

「俺は家族を守れるかな?」

「……先輩ならできますよ」

頭に何かが当たった。
多分、撫でられてる。

「頑張つて、先輩」

「……ありがとう」

優しい言葉をかけてくれた人よ、ありがとう。
恋とは大違いだな……。
今度はなんか股間の辺りが……。

「恋!？」

「チツ、起きたか……」

「またお前は!!」

「まあ、よいではないか。よいではないか」

「あゝれゝ」

とことん、色々吸われました。
サヨナラ、現世。

「ただいま……」

「おかえり、秀明くん……って」

出迎えてくれたのは、美代ねえだった。

「ん、どうした……？」

「なんか、……精力が無いね」

「ああ、恋に色々吸われた……」

「そ、そう……。すっかり紳士モードだね……」

「ははは……、ちょっと休む」

俺は体を無理やり動かし、部屋に入り、ベッドに倒れるように飛び込んだ。

本当に家族を守るだろうか？

両親と交わした約束を、守れるだろうか？

父、茂樹の言葉と、母、優花の言葉がずしりとのしかかる。

今、二人は仕事の関係で出張中。しばらくは、俺が面倒を見ないといけない。

「がんばらないと、な」

「お兄ちゃん、起きてよ。お兄ちゃん」

「ん……、智花？」

どうやら、眠っていたようだな。

「もう七時だよ……、お腹空いたよ……」

「マジ……。ごめん、今作るよ」

俺は急いでキッチンに向かった。すると、そこには美代ねえがいた。

「あたしも手伝うよ」

「……ありがと、美代ねえ」

「……なんか、元気ないなあ。どうかした？」

「ううん、なんでもない」

「……父さん、母さん。

俺、頑張るよ。

家族を守るように。

……しかし、だ。

なんか、焦げ臭い。

すぐ隣から、凄い臭いがする。

まさか、ね。

「やつちゃった」

テヘッ、と言わんばかりの美代ねえ。

「『やつちゃった』じゃねえよ!!」

台所クライシス、再来。

もう止めて!!

台所のライフはとくにゼロよ!!

……最終的には、近くのコンビニ弁当に、昨日作ったサラダが、夕食になった。

南無、台所。

これで、五十六代目だね……。そんな遠い目をしていると。

「本当に大丈夫? 秀明くん」

美代ねえが覗きこんできた。

「……ん、大丈夫だよ」

「嘘。お姉ちゃんに嘘をつくなんて悪い子だね」

「うつ……、ごめん」

やっぱり、かなわないな。美代ねえには。

「俺、みんなを守っていけるかな?」

うつむく俺。

「大丈夫だよ。君ならできる」

「美代ねえ……」

「もし、ダメだったとしても、あたしが……、うつん、あたしたちが助けてあげるから。ね？」

「美代ねえ……」

「一人じゃ、出来ないかもしれないけど、三人でやればいいじゃん。あたしと秀明ちゃんと智花ちゃんです」

「そう……だな」

家族は、支え合うもんだからな。

「ありがとう、美代ねえ」

「どういたしまして」

さて、と。

「まずは、キッチンの後片付けでもするか……！」

「「はい……！」」

頑張ろう。

俺たち三人で。

支え合っんだ。

みんなで家族を守り合っんだ。

だから、……みんな、これからもよろしくな。

ラブレターの悲劇…… by 智花（前書き）

そついや気付いたんですよ

人気のある携帯小説は

1、なんか理不尽な程、ハーレム

2、なんか主人公TUEEEE!!

3、なんからぶえっち

……。

日常にそんなの求めないで!!

ラブレターの悲劇…… by 智花

「大変なんだ!!」

「美代ねえ……。いったいどうしたんだよ」

そんな肩を掴んで振り回さないで……。

……うえっぷ。

吐きそうだ……。

「智花ちゃんが……。智花ちゃんが……」

今にも崩れ落ちそうな美代ねえ。

「おい、智花がどうしたんだよ!!」

まさか、事件に巻き込まれたとか……!!

「ラブレターもらって来ちゃったって!!」

「なんだよわりとどうでもい……。よくない!!」

そりゃあ、大事件だろ!!

「というわけで、家族会議を開きます」

「どーゆーわけで!?!」

さっそく突っ込む智花。

机を囲んでいる俺たち三人。

いつの間にやらセッティングされていた。

「さて、今回の会議を開いた理由は言わずとも分かるだろう」

重々しい口調の美代ねえ。

なんか空気がヘビーです。

「清川家の次女、我らが智花がラブレター、いや、love letterを貰ってきたのだ!!」

「恥ずかしいから大きい声出さないで!!」

顔を真っ赤にしている智花。

なんか鮮血の赤って言っても遜色ないくらい赤いです。

「ところで、そのラブレター……、いやlove letterは？」

「お兄ちゃんまで!! っていうか、二人とも地味に発音つまりし!!」

じたばたと落ち着かない我が妹。 ああ、愛は人を狂わせるんだな……。

「……これ？」

美代ねえはそのlove letterをつまみ上げる。

手紙は意外とお洒落な感じだった。

「開けてみるか……」

俺はそのlove letterを開こうと……。

「待って!!」

智花が俺たちの間に割り込んできた。

そして、すっかり手放してしまったlove letterは今、
智花の手中にある。

「まだ私が読んでない!!」

「まあまあ、一緒にお姉ちゃんと読もうよ」

「俺も気になる」

「……………うう」

観念したのか、美代ねえに例のlove letterを渡した。
そろそろ、love letter言うのがめんどくさくなった。

「えー、では。秀明くん、読み上げたまえ」

「御意のままに」

「何でそうなってるの!?!」

智花の突っ込みを軽くスルーし、俺はラブレターの内容を読み上げ

る。

清川智花へ

いつも目立ってるお前が凄く気になっている。

明日の放課後、お前の教室で待っている。

ゆっくり語り合おう。

……逃げんじゃねーぞ。

「果たし状じゃん!!」

読んでた俺はたまらず突っ込んだ!!

love letterじゃないじゃん!!

誰からの手紙かわかんないし!!

「それにしても智花ちゃん……。果たし状を貰っちゃった頃になっちゃって……!!」

美代ねえが涙ぐんでいる。

「いや、年頃関係ないから!!」

智花、俺もそう思うぞ。

とりあえず、智花をいじることにする。

「智花、お前やばいぞ。ヤキいれられるぞ……」

「ひっ」

ビクッと震える妹。

もうちょっとからかってやる。

「スケ番に根性焼きされるぞ」

「うう……」

「もしかしたら他校の番長たちがお前を……ああ恐ろしい」

「いったい、何をされるの!?!」

「……………死ぬなよ?」

「命に関わるの!?!」

「もしかしたら……。湾に沈められるかもよ?」

「なんで!?!」

「……………悟ってください」

「そんなにヤバいの!？」

「……………グッバイ、智花」

「……………も、もう止めてえ!！」

手紙を驚掴みした智花は、部屋に逃げ込んでしまった。
あーあ…………。

「残念そーな顔をしない」

美代ねえに頭を叩かれた。
ゴリツとイヤな音がする。

「…………俺なんかラブレター貰ったことないな」

果たし状ならあるが。

…………主に恋から。

あれはもうラブレターではない。あれは愛ではない。
恐怖だ。

「あたしもないな…………」

「そりゃ、見た目が良くても中身が終わっ」

その時、俺はどうなってしまったのか？
そんなの知らない。

美代ねえの竜巻旋風脚により意識が魂とともに召されたからである。

グッバイ、現世。
コンニチハ、天国。

晩御飯の時間にて

「で、どうする？ 智花ちゃん」

美代は肉じゃがを頬張りながら言った。

……お行儀がちょいとばかり悪いです、お姉様。

「どうするって言われても……」

まあ、困惑するだろうな。

初めてのラブレ……いや果たし状だからな。

そしてさっきから智花は俺の方をチラチラと見ている。

「とりあえず、なんかあったら俺が助けるから。放課後、急いで向かうからさ」

誰だか分からない奴が、襲う可能性があるからな。

「うん、お願い」

「……でもさ。これがもしラブレターだったらどうすんの？ 秀明くんは」

「そりゃ……」

……。
……。
……。

「その男をぶつ殺す」

「ダメ!!」

我が妹に止められた。

「え、ダメなの？」

「当たり前だよ!!」

「じゃあ……。半殺しで」

「ダメ!!」

これでも駄目か……!!

「じゃあ……。四分の一殺し」

「ダメ!!」

「えー……」

じゃあどう殺せばいいんだよ……？

「ならば……。二分の四殺し!!」

「二回死ねと!?!」

まあ、そういうことになります。

「……とにかく!」

智花は机をバンと叩いた。

智花さん、行儀がちよいとばかし悪いです。

「明日……、お願いね。お兄ちゃん」

「……分かった」

ま、結果は明日、分かるだろう。

こっそり智花の学校に忍び込んだ俺。
智花は昇降口のところで、待っていた。

「お兄ちゃん、お願いね」

「ああ」

……それにしても、なあ。

智花にも恋人ができるのか……。なんか、嬉しいような、悲しいような。

……しかし、いったいどんな男なんだろうな。

……チャラ男だったら絶対ぬっ殺す。

ぶっ殺すのさらに上の、『ぬっ殺す』。

……意味は聞かないで欲しい。

だって、心臓に悪いし。

「ここにいて」

「ああ」

教室の前についた。

どうやら、教室にいた誰かが智花に気づいたようだ。

「…………東海林くん？」

智花はそう呼んだ。

誰かは知らんがやつぱり、男。

おい、東海林。

妹に手を出したらぬっ殺すからな……。

「よかった……。来てくれたんだ」

あれ、なんか番長みたいなのを予想してたんだけどな……。いかにも草食系な……。

「あの手紙って……。東海林くんがくれたの？」

「…………うん。驚いた？」

「ま、まあ……」

果たし状だったもんな……。

「えーと、さ」

うつむき気味に話す東海林。
本当に番長かよ……。

「ぼ、僕とつきあってください!!」

「ラブレターかよ!!」

「ラブレターだったの!？」

同時に突っ込んでしまった俺たち兄妹。

「……え、なんか変なところでもあった？」

「いや、これどうみても果たし状だし!!」

「え……、これが正しいラブレターの書き方って教わったのに……」

激しく間違ってるし!!

てか、東海林お前も気付け!!

どー考えでもおかしいじゃん!!

てか手紙だと態度悪っ!!

「……話を戻そうか」

「う、うん」

再度、緊迫した空気が流れる。

……なんか、いちゃマズいよね。ちょっと離れた所にいようと。

「……どうだった？」

「……断ってきちゃった」

「どうして？」

「他に、好きな人がいるから」

「それは……誰？」

「……教えない」

「教えるよ」

「……乙女のお秘密ということだ」

「はいはい分かったよ」

誰だかは知らないけれど、そいつはきっと幸せ者だな。
何だか、そいつが羨ましいな。

ラブレターの悲劇…… b y 智花（後書き）

東海林くんについて……。

……え、と。

特にないで（r y

ヴァイオリンの悲劇……

b y 秀明（前書き）

アンネちゃん忘れてた

ゴメンね

ヴァイオリンの悲劇……

b y 秀明

「ヴァイオリン？」

「はい、アンネは今頑張って練習してます」

金髪の美少女は少し古びたヴァイオリンを構え弾く体勢をとった。

「聴いてくれますか？」

「ああ、もちろん」

俺は笑顔で返す。

いやー、それにしても楽器の美少女の弾ける女の子って萌えるよね
！！

今度、智花にもなんかやらせようかな。

「なかなか、様になってるじゃん」

「えへへ、ありがとうございます」

俺はアンネちゃんの演奏を心から聞こうとした。

そして俺は意識を失った。

「ヴァイオリン、怖い」

「どうしたん？ 秀明くん」

「美代ねえ、ヴァイオリンが怖いんだよ」

「よしよし、怖かったでちゅね」

美代ねえに頭を撫でられる。

赤ちゃん言葉なのは気にしない。

「まさか、あんな奇怪音が出るなんて……」

「新しい言葉だね。『奇怪音』」

ヴァイオリンのあのまるつとしたフォルムを思い出すだけで震えが止まらない。

「アンネちゃんに……殺される……!」

「いやいや、それはないから」

「あ、あの……」

アンネちゃん、ここに降臨。

「いうおえああいう!」?

「秀明さん!？」

俺はまた意識を失った。

「本当にごめんなさい……」

しょんぼりしているアンネちゃんを見ると、なんだが心が痛いので、とりあえずフォローする俺。

「い、いや、いや。気にしないで……うん」

「めっちゃ震えてるし……」

美代ねえ、そんなこと言わないで!!

「とりあえず、その物騒なまるつとした物体を視界に入れないで!!」

「は、はい!!」

……ふう、危機は去ったな。

「あつ、手が……」

なんと仕舞ってあったヴァイオリンが俺の目の前に……!!

「うわああっ!!」

ギリギリの所でヴァイオリンを受け止める。

「……危なかったな」

「あれ、秀明くん。ヴァイオリン大丈夫なの？」

「……あ」

今日はよく意識を失う日です、お母さん。

「ヴァイオリン、この世から抹消すべし」

「なんかお兄ちゃん……、目が……」

智花がなんか言ってる。

「本当にごめんなさい、秀明さん」

アンネがなんか謝ってる。

「おい、戻ってこーい」

美代ねえがなんか話しかけてくる。

「ははは、ヴァイオリン。ヴァイオリンを駆逐せよー!!」

「」「駄目だから!!」「」

三人同時に、殴る、蹴る、ひっぱたく。
こんなに意識を失っちゃう人っていますか？

「大丈夫？」

「ああ、もうなんか慣れちゃったよ」

慣れって恐ろしいな。
もうヴァイオリンが怖くない。

「アンネ、もっと練習してから演奏します……」

「次からそうしてくれよ」

「はい……」

しょんぼりと帰って行くアンネちゃん。

「楽しみに待ってるよ」

「……はい!!」

やっぱり可愛いな…… アンネちゃん。
ニコニコ（周りはニヤニヤと言ってる）と笑顔をアンネちゃんに見せた。

アンネちゃんも笑顔を見せてくれた。

……よかった、元気になって。

「……お兄ちゃんって」

「ん？」

「……なんでもない」

なんかご機嫌斜めな智花。

……なんなんだか。

アンネちゃんは、どうして俺にヴァイオリンの演奏を聴かせようとしたのか。

ま、後になったら分かるか。

……できれば、ヴァイオリンの演奏がもっとうまくなってから聴きたいけど。

「秀明くん？」

「はい？」

美代ねえが俺の顔をのぞきこんできた。

「生きてる？」

「生きてるよ？」

「五十回くらい声かけたけど、返事ないからひっぱたいてみたら本当に返事しなくなって……」

「それが原因じゃん！！」

やっぱり、この姉が恐ろしい。

この姉が恐ろしいランキング堂々の一位になれるな、間違いなく。

「失礼なこと考えてたでしょ？」

「いーえー、滅相もない」

「嘘。……一回死んでみる？」

「こんなんで殺さないで！！」

シャレになんないくらい恐ろしいランキング堂々の一位になれるな！！
！！ 120パーセントの確率で！！

ゴリッ！！

「美代ねえ……、ヒドいよ……」

「知らない、寝てなさい!!」

隣から聞こえる魔性のヴァイオリンの音を聞きながら、俺は意識を失った。

これで何回目？

分かる方、俺に教えて。

今なら限定グッズが……!!

特にないですいません。

あまりにも清川秀明が意識を失いすぎて、可哀想そうなのでみなさん彼に優しい言葉をかけてあげてください。
あと、ヴァイオリンは見せないであげてください。

清川家一同より

ヴァイオリンの悲劇……

b y 秀明（後書き）

秀明、今はゆっくり休んでいてね!!

バイトの悲劇……

b y 美代

あたし、清川美代がコンビニでバイトしてる最中に思わぬことが起きた。

「いらっしゃ……」

まさかの人が来た。

「……父さん」

そう、父の茂樹だ。

なんで、ここに？

「はは、嬉しいですね。『父さん』と呼んでくれるなんて」

「……」

まだ、わだかまりはあるけど、一応普通の家族みたいに接すること

はできるようになった。

少し、気恥ずかしいけど。

「ところで美代さん。オススメ商品ってありますか？」

「え？ ああ、はい。こちらになります」

父さんを連れて、棚の商品を取り出す。

「こちらなんていかがですか？」

「育毛剤、ですか？」

「ちよいどいいかと……」

「いいません」

あ、戻された……。

チッ。

「あ、これなら……」

「避妊具……。そんなに私が無節操に見えますか？」

「はい」

「即答されると悲しいですね……」

あ、戻された。

これもダメか……。

「これなんていかがですか？」

「暴君ハバ。口……。食べると言っんですか？」

「はい、後口引く辛さがたまらないとの評判です」

「いいりません」

笑顔で返された。

これもダメか……。

「あ、それよりおでんありますか？」

思い出したかのように告げる父さん。

「おでんですね」

まだおでんには早いと思うけどな……。

「じゃあ、……………えーと」

迷っているようだ。

「早く決めてください」

さりげなく急かしてみる。

「ん……………もう少し時間を」

「何にするんですか？」

「えーと……」

「レジが混んできたので早めをお願いします」

ちなみに、これは嘘だ。

「じゃあ……、スマイル下さい」

「マク。ナルドへ行ってください!!」

マクドナ。ドでその台詞言っても苦笑しか帰ってこないだろうけど……。

ま、知らないけどね。

「え、スマイル0円って聞いたんですけど……」

「どこかの店と絶対勘違いしてるよね!!」

ついに、地が出てしまった。

バイトでは出ないようにしてたのにな……。

もういいや、このテンションで行く。

「スマイルが駄目なら……。あ、おでん下さい」

そっぴやさっき、おでんって言ったよね。

「えー……、玉子ください」

「玉子ーつっ」と

「さらに玉子ください」

「……玉子ーつ」

「あと玉子ください」

「玉子……一つ」

「以上で」

「玉子だけ!？」

「何か問題でも？」

「い、いや、ないけど……」

「あとは……、カラシもお願いします」

「……」

大量にそそぎ込んでやった。

「あー、その五倍入れてください」

「それはさすがにもつたいない!！」

最初に大量にあたしが言える台詞ではないけど……。

「225円になります」

「一万円から」

千円札十枚……。

「一枚で結構です」

「一万円から」

「……了解しました」

レジに打ち込んでいると。

「貴方には分かりますか！？ たかが、たかが225円のために一万円を出さなければならぬこの悲しみを……！！ 財布が重くなるという煩わしさを……！」

「あれ！？ そんな話どっから出た！？」

「一万円がバラバラになってしまふこの辛さ、貴方は分かると言うんですか!？」

わざわざ十枚も出しておきながらなんなんだ、いったい!？」

「……おつりです」

「小銭を文鎮代わりにレシートを置くのは、許せません。万死に値します」

「それぐらい許してよ!!」

よくやるけど、そんなに腹立つことなの!？」

「財布に入れにくいんですよ、分かりますか?」

「まあ……分からなくはないけど」

「ああ、あと玉子ください」

「まだ食べんの！？　っていうか、なんか急な注文！！」

「あと、どうみてもカラシ入れすぎです。抜いてください」

「もっと入れろとか言ってたくせに！！」

今世紀最大のめんどくさい客だ！！

「……………はあ」

思わずため息が出た。

「はい、どうぞ」

「レジ袋いりません」

「そういうのは早く言って！！」

「レシートもいりません」

「はい、そうですか!?!」

「レシートを貰わない。なんてエコでしょう」

「知るかつ!! むしろ、レジ袋でしょうが!?!」

ああ、もうヤダ!!

「はい、どうぞ!?!」

「熱くて持てません。やっぱりレジ袋を……」

「帰って!?!」

「はい、分かりました」

すると、すぐにドアの方に向かっていった。

「元気そうで、よかったです」

「……」

あたしは、何も言わず、その背中を見つめた。

「今夜もまた、来ますね」

「……またのご来店をお待ちしています」

少しだけ、嬉しかった。

父さんがあんなこと言ってくれるなんて。

その夜。

「玉子ください」

「入店直後に言わないでよ!!!」

「ついでにスマイルもください」

「もういいよそのくだり!!」

ホントに来たよ……。

あたしからも仕返ししてやる。

「お客様、避妊具をお買い忘れになられていましたよ」

「美代さん、玉子好きですか？」

「聞いちゃいないな、人の話!!」

「美代さん、玉子好きでしたもんね」

もう泣いていいですか？

「いえ、あたしは好きではないです」

「ちくわは好きですか？」

「……………」

なんか、涙が…………。

目から汗も出てきた…………。

…………同じか。

「ちくわは…………、微妙で」

「美代さん、玉子好きですか？」

言い終える前に、彼は聞いてきた。

「人の話を聞いてよ！！　ってか人の話を聞いとけよ！！」

それにしても、エッグストーリー再来である。

…………もうやだ死にたい。

「美代ねえ！？　どうした、なんか色々尽き果ててるぞ！？」

秀明くんが心配した表情で、あたしをリビングに連れて行く。

「あー、秀明くん……」

「何かあったのか？」

「バイト、恐ろしい……。もうやだ働かない」

「美代ねえがニート発言！？」

「今は一人にさせて……」

あたしはそう言い残し、部屋へ倒れるように入った。

あたしは、固く、もう二度とコンビニ店員にはならないと決めた。

だから、今日はコンビニ店員にならないと決めた記念日。

バイトの悲劇……

by 美代（後書き）

それにしても、

悲劇三連続である。

サンレンダア！！（グオレンダア！！的な意味で）

ここで悲劇を断ち切る!!

b y 秀明

(本編に影響無し)

(前書き)

気づいたらヒット数が10000を普通に超えていました。

YATTANE!!

「ここで悲劇を断ち切る！！」

b y 秀明 （本編に影響無し）

「……………智花が風邪？」

珍しいこともあるんだな……………。

「あたしはこれからバイトがあるから……………、面倒見てあげて」

「ああ、分かった」

「ゴメンね」

「気にすんなって」

俺は美代ねえを見送った。

……………ていうか、今日フツーに学校あるんだけど……………。

ま、今日はたいした授業はないし、サボるか。

そんな不良チックなことを思いつつ、俺は病床に伏せっている妹の

部屋をたずねることにした。

「智花。入るぞ」

「いいよ」

俺は部屋に入り、智花のベッド隣に腰掛けた。

「風邪、ひいちゃった」

「……まったく」

額のタオルを取り替えてあげた。

「お兄ちゃん。今日、学校……」

「ん？ ああ、今日はサボる」

「駄目だよ……、遅れちゃうよ？」

「可愛い妹が寝込んでるのに、学校なんて行つてられるかよ」

「そんなの……、サボる口実にはならないよ」

「まあまあ、そう言わず」

少しだけ、頬が赤い智花。

「それにしても、暑い……」

「ん？」

「……かと言って、脱ぐと寒いし……」

なんか、智花の様子が……。

「今日は一体どんな天気かな、お兄ちゃん……」

「おまつ、どうした！？　なんかお前らしくないぞ……！」

智花がなんかボケてる!!

こいつはあ、いってえどどういうこった!?

「ん……、大丈夫。今、脱いだから暑くない……」

「やめい!! 俺の目の前で脱ぐな!!」

……どうやら、清川家の人間が風邪をひくと、色々おかしくなる模様です。

俺もそうだったみたいだし……。
前途多難だ……。

「あゝ、お兄ちゃん?」

「どうした、智花」

「なんかね、川の方こうでおばあちゃんが手を振ってる……」

「は？」

ちなみに、おばあちゃんはもう亡くなっている。

「……え、渡っちゃダメ？」

「……おい、智花」

それはもしかして……。

「え……、この川の名前は……『三』つの『途^{みち}』と書いてミートの川……？」

「三途の川だろ！！ てか渡っちゃダメ！！」

智花が……、あんなに賢かった智花が……。
熱で駄目になっちゃった！！

「納豆おいしいよね。はむはむ」

三途の川には納豆は流れていません。

水戸繋がり、ちょっとひどい。

……ていうか、苦手だろ。

智花は納豆嫌いだろ？

「特にこのネバツとしたところが……マズい」

「マズいんかい!!」

言ってることが矛盾しまくってるし……。

「おい。智花本当に大丈夫か？」

兄さんは心配です。

「ん……。大丈夫じゃないかも……」

「ですよ……。ちょっとお粥作ってくるから待ってるな」

智花一人を残すのには気が引けたが……、きっとお腹が空いてるだろうなと思い、俺はキッチンへ向かった。

それにしても、本当に大丈夫か？アイツは……。できたお粥を持ち運ぶ。

「できたぞ」

「うん……」

……大丈夫ではないな。

「はい、どーぞ」

「いただきます」

「ほら、食べさせてあげるから」

「……ありがとう」

少しばかり顔が赤い。

……ま、そこはあえて追求しないことにする。

できたてのお粥は当然のごとく、熱い。

フーッと息を吹きかけ、冷ます。

「はい、あーん」

「……お兄ちゃん」

「何だよ？」

「やっぱり……、ちょっと恥ずかしい」

布団で顔を隠してる智花。

可愛い奴……。

「はい、あーん」

「いや、でも……。一人で食べれるよ?」

「はい、あーん」

「分かったよ……」

ついに覚悟を決めたみたいだ。

智花は目をつぶって口を開けた。

「……おいしい」

「だろ?」

隠し味は、シヨウガにしてみた。
案外、好評みたいだ。

数十分経って。

「ごちそうさまでした」

「お粗末さまでした」

綺麗に残さず食べてくれた。

「……ごめんなさい」

「なんで謝るんだよ」

「迷惑、かけちゃったでしょ？」

「気にすんなって」

「うん……」

「じゃ、俺は学校に行くよ」

時計は、十時を指している。

まあ、やっぱり行かなきゃ駄目だよな。

俺は立ち上がり、智花の部屋を出ようとしたその時。

「……………」

袖を掴まれた。

「……………」もうちょっとだけ、ここにいて

「……………」分かったよ

なぜ、彼女がそんなことを言ったのかはわからない。

でも、智花がそう望んだんだ。

俺はもう一度座り込んだ。

「……………」寝るまで、いてくれる？」

「ああ、いいよ」

「……ありがとう。お兄ちゃん」

その後、智花はすぐに寝てしまった。

俺の袖をしっかりと握りながら。

「はは……、まいったな」

仕方ないな。

今日はもう休んじゃおう。

気付いたら、もう五時になっていた。

「やっべー……」

とは言っても、そこまで危機感はないが。

ま、誰かからノート借りよう。

智花はだいぶ調子が良くなったようで、顔色は血色良い。

ピンポン。

「ん、誰々……」

よく見ない顔だが、誰だか分かった。

確か、東海林だったか？

「あの……、東海林ですけど」

「どうかした？」

「学校に連絡が来なかったので……」

「あー、しまったな」

忘れてた。

すっかりすっかり。

「あの……智花さんは？」

下の名前で呼んでんじゃねえ!!

なんだかなあ、オイ!!

「ああ、今は寝てるよ」

とりあえず、冷静に返しておく。

「そう、ですか……」

なんだ、その顔が見たいと言いたげな目は。

見せないぞ、意地でも合わせないぞ。

「……東海林くん？」

「智花さん……」

あー、なんだ、この気まずい雰囲気。

あつ、俺が原因か。

アッハッハッハ!!

すみません、エアーをリーディング出来なくて。

「プリント、これだから……」

東海林はファイルからプリントを取り出し、智花に渡した。

「あ、ありがとう」

「じゃあ、また明日ね」

「う、うん」

「……失礼しました」

俺の方に、お辞儀をし、そうして東海林は去っていった。

とりあえず、顔が赤い智花を部屋に戻らして、寝かせてあげた。

「智花ちゃんは？」

バイトから帰ってきた美代ねえは開講一番、智花の様子を聞いてきた。

「もう大丈夫。明日になったら復活するよ」

「良かった……」

ふう、と安堵のため息を吐く美代ねえ。

「で、秀明くん。学校行つた？」

「休みました!!」

「胸を張るな!!」

怒られちゃった。

「……ま、妹想いってことで、許して」

「はいはい」

美代ねえはヤレヤレといった感じで部屋に引っ込んだ。

「おはよう、お兄ちゃん」

「おはよう、智花」

もうすっかり元気になったみたいだ。

よかった……。

「あ、手伝うよ」

「ん。ありがとう」

やっぱり、いい子だよな……。
智花は。

あの東海林って奴には絶対に渡したくないな。

あんな優男になんか……。

「お兄ちゃん！！ ケチャップかけすぎだよ！！」

「……あ」

今日のオムレツは真っ赤です。

その後、スタッフ（家族）が美味しく頂きませんでした。
兄は悲しいです。

ここで悲劇を断ち切る！！

b y 秀明

（本編に影響無し）

（後書き）

誤字、脱字があればなんなりと。

秋アニメヤバすぎ豊作だろ……

プッチン智花ちゃんと秀明くん by 美代

（秀明視点）

「あ、お兄ちゃん。私のプリン……」

「え？」

「何で食べてるの……？」

やばい、やっちまったな、俺。

ベスト・オブ・ヤツティモーティストだな。

つてか、食の恨みは怖いしな……！！

なんか、いい言い訳を……！！

「ああ、確かに俺が喰った。だが、メインディッシュはこれからだぜ。それは、お前だ……」

智花の顎に手を添えてみる。

「お兄ちゃん、さすがにそれはないよ」

「すみませんでした」

人間、素直が一番だよ。

うん。

はい。

「返してよ、お兄ちゃん」

それにしてもこの妹、プッチンしてますね。

……プリンなだけに。

「……………うえっぷ」

「無理に出さなくていいよ!」

さすがに駄目だよな、吐くのは。

「な、名前書いてないから気付かなかったよ」

「書いてあるんですけど……」

「あ」

本当だ。

模様だと思ってた。

えーと、これはだな……。

「お前を食べたかったけど、我慢してプリンを喰ったんだよ……！」

ほんの少し、沈黙タイム。

「だからなんで禁断の兄妹愛みたいな言い方をするの!？」

一瞬遅れて、真っ赤な顔した妹様。

……あるえ？

これを言えばだいたいの女はオチるって聞いたのに……。

「…………もう!」

あ、行っちゃった……。

「プリンだけで怒りすぎだろ……」

ま、なんか代わりのものを作ればいいか。

〔智花視点〕

楽しみにしていたプリン、食べられちゃった……。

あーあ……。

そしてなんか変なこと言ってきたし……。

メインディッシュとか食べたいとか……。

「お兄ちゃんのバカ」

はあ……。

ため息なんて、幸せが……。

はあ……。

ようやく買えたプリン、が……。

いつも売り切れていて、滅多に買えないのに。

とりあえず、五分間くらいお兄ちゃんを心の中で罵倒した。

……イヤな女かな、私？

〈秀明視点〉

さて、どうしたものか。

智花は話してくれないし……。

代わりにプリンを作ってみたけど、反応すらしてくれないし……。

やっぱり、食の恨みは怖いなあ……。

がくがくぶるぶる。

「智花〜？」

「…………ふん」

いやいや、すねすぎだろ…………。

なんだか腹が立ってきた。

そこまで怒ることも無いだろ？

その後、晩飯が出来るまで一言も話をしなかった。

…………少しだけ、心が痛かった。

〜美代視点〜

どうしたものか…………。

秀明ちゃんと智花ちゃんの仲が悪いです。

珍しい、珍しすぎる。

今期のベストオブ珍しさに軽く入賞してしまうくらいだ。

「二人ともどうかした？」

「別に」

「ハモってるあたりからして、絶対なんかあったよね」

「いや」

「私たち」

「何も」

「無かったよ」

なんか秀明ちゃんと智花ちゃんが交互に話してきました。

なにその連携プレイ。

かなり訓練してもできないと思うよ、それ。

「……何かあったでしょ？」

「……お兄ちゃんが私のプリンを食べたの」

「うおい、そこは黙ってるよー!!」

そんな理由で喧嘩してたんだ……。

心配して損したような……。

ま、大事じゃなかったからいいか。

「なーんだ。やっぱり、そんな理由だったんだ」

はははっ、笑うあたし。

「そんなこともあるのかと」

あたしはバッグからとあるスイーツ店のプリン、つまりは智花ちゃんが食べたかったであろうプリンを出した。

「それは……!!」

「そう、あの店のプリン」

「よっしゃー!! いただきー!!」

「お兄ちゃん、少しは反省しようよー!!」

「はい……」

とりあえず。

プリンおいしかったです。

〈秀明視点〉

「と、いうわけで。わたしをここに一週間泊めさせてください」

「……ナニライツテルダ。コノコウハイハ？」

「お兄ちゃん、片言になってるよ」

い、いや。

俺、落ち着け。

ヤバいぞ、恋が来た。

いや、嫌いではないけど。

良い奴だし、可愛いし、ちょっといやかなり変態だけど!!

別に嫌いではないが!!

てかむしろ好きだが!!

……コホン。

とりあえず、ウチの女性率をあげないでほしいです。

女三人に男一人。

間違いなく間違いが起きます。

「ってか、なんでウチに泊まる必要があるんだよ？」

「いやゝ。可愛いものを集めてたら部屋の床をぶち抜いてしまいまして……」

「かつての俺じゃん!!」

デジャヴを感じました。

「二人とも似たもの同士だね」

笑いをこらえている美代ねえ。

「そうですね」

ニヤニヤと笑う恋。

とりあえず。

貞操を守り抜こうと思います。

く美代視点く

「ねえ、恋ちゃん」

「なんですか？ 美代さん」

「一週間、って言っていましたよね？」

「そうでしたっけ？ あ、先輩。今日のご飯はこってりしたやつが
いいです」

「分かった。しゃぶしゃぶにする」

「聞いてませんね、人の話」

「むしろ恋ちゃんでしょ……」

あたしは思わずため息をついた。

カオスな日常の始まりの予感がした。

ブッチン智花ちゃんと秀明くん by 美代（後書き）

これもあと少しで終わりです

ね、ネタ切れなんかじゃ……

わたしの先輩がこんなにデレるはずがない！！

b y 恋

（秀明視点）

朝。

とりあえず、俺の部屋の押し入れの中で寝てた。

どうやら、危機は免れたみたいだ。

いや、別に恋とあんなことやこんなことをしたくないわけではないが……。

まあ、お互いの了承を得てからの……がいいわけで。

手順が大事なのです。

まったく、恋はそれを無視して……。

ぶつくさ言いながらも、リビングに向かった。

朝食は恋が作ってくれている。

「世話になっているから」と彼女は言っている。

事実、ありがたい。

ただ。

「智花ちゃん。可愛いよ」

「や、やめてー!!」

とりあえず、妹を襲うのはやめてください!!

朝からツッコミに忙しい俺であった。

朝食の後片付けをしていると。

「お兄ちゃんは、恋さんのことが好きなの?」

「直球だな、おい!!」

ま、まあ、変に回りくどいよりはマシだけど。

「……まあ、嫌いではないな」

「ふうん……、良かった」

「何が？」

「なんでもない。……なんで好きなの？」

「いや、好きなんて……」

「どっちつかず……」

「うつ……。ああ、好きだよ。アイツのこと」

「……そうなんだ。で？」

一瞬、悲しそうな顔をした智花。

「まあ、明るいところとか、前だって俺のこと気遣ってくれたし」

「……へー」

「な、何だよ」

「何でもない」

……何だっただ？ いったい。

（美代視点）

「どうしたの？ 恋ちゃん」

すごく顔の赤い恋がそこにいた。

「先輩が……わたしのことを、好きだって……」

あ、あれ？

もう彼氏彼女の関係だと思ってただけだな……。

「付き合ってるんじゃないの？」

素朴な疑問だ。

特に他意はない。

「わたしが、一方的に好きなだけです」

「へー」

「な、なんですか？」

「今なら、チャンスかもよ？」

「……なかなか、言えないですよ。一週間、結局言えてないですから」

「……ま、がんばりなさい」

「はあ……」

恋ちゃんはそう言い残し、どこかへ行ってしまった。

秀明くんも、大変なことになりそうだね……。

（智花視点）

私はお兄ちゃんが好き。

家族としてもだけど、男の人としても、好き。

おかしいのは分かってる。

でも……。

好きなものは好きなんだからしょうがない。

でも、いつからだっただろう？

初めて会った時？

病気の看病をしてくれた時？

それとも、たった今？

分からない。

分からないけど。

この気持ちを伝えようと思った。

けれど、恋さんが……。

ううん。

恋さんがじゃなくて、お兄ちゃんが好きなのは、恋さんだったことが、私の決心を鈍らせた。

「はあ」

思わず、ため息が出る。

……でも、この気持ちを伝えないと、一生後悔しそうな気がする。

私は、ゆっくりと立ち上がりお兄ちゃんの元へと向かった。

〈秀明視点〉

「あ、あのっ。先輩!!」

「ん、どうした？」

少々顔を赤らめている恋。

「その……ちょっといいですか？」

ちょっと様子がおかしい。

いや、ちょっとどこの騒ぎではない！！

恋らしくない！！

なんかしおらしい！！

「どうしたんだよ、恋？」

動揺を心の中に隠し、尋ねてみる。

「あの……、先輩」

「だから、なんだよ？」

すーはー、すーはー、と深呼吸する恋。

「わっ私、先輩のことが好きです！！」

「……はい？」

うん、なんか嬉しいことを聞いたような気がする。

「パードウン？」

思わず英語で聞き返した。

「だから、先輩が好きなんです!!」

その時。

「お兄ちゃん……?」

智花、ここに現る。

うん。

なんか。

冷や汗が止まらない。

……アハハハハハ。

え、智花さん？

何で涙目？

え、恋さん？

何で気まずそうにするの？

すみません、ヘルプミー。

……とりあえず。

俺の命はないと思った。

こっちにくる智花。

え、俺もしかして叩かれる？

と、思いきや。

そのまま俺の横を素通りし、猛ダッシュで外に出て行ってしまった。

その時に発せられた言葉は……。

なぜか心にずっしりとのしかかってきた。

「智花ちゃん……」

恋も気まずそうにしている。

「『お兄ちゃんのバカ』か……」

俺はその場を立ち尽くすことしかできなかった。

（智花視点）

私って、イヤな子だな……。

恋さんに嫉妬なんかしちゃって……。

やっぱり、二人は相思相愛なのかな……？

私には、入り込む隙間もないのかな？

ため息が出てきそうだ。

「あれ？　ここって……」

無我夢中になって走ってきたから分からなかったけど、ここはお兄ちゃんたちと初めて一緒に遊んだ公園だ。

懐かしい、な……。

「あのときに、戻ればいいのに……」

辛いよ……。

こんな感情をお兄ちゃんに抱くなんて。

（秀明視点）

「智花ちゃん、泣いてたよね」

「ああ」

「その……。ごめんなさい」

「いいよ、これは俺の問題だから」

複雑な表情を浮かべる恋。

「さっきの告白の返事だけども。今はちょっと待っててくれないか？」

「いいですよ。わたし、待ってますから」

「ああ、ありがとう。じゃ、ちょっくら行ってくる」

俺は急いで、智花のもとへと向かった。

なんか大変なことになった……

by 美代

〈美代視点〉

「なんか大変なことになったな……」

複雑な三角関係って奴？

まあ、……ぶっちゃけどうでもいいような……。

「秀明くん。どうすんの？」

「追いかけるしかないよ。……行ってくる」

「そう、いつてらっしゃい」

……世話のかかる弟だ。

それにしても、智花ちゃん。

やっぱり秀明くんのが好きだったんだ……。

恋ちゃんも秀明くんのこと好きだし……。

モテる弟なこと……。

「ま、頑張つて」

あたしは、小さく応援した。

（秀明視点）

まったく、智花の奴、どこに行つたんだよ……。

とにかく、手当たり次第に智花が行きそうな場所をシラミ潰しに探したが……どこにもいない。

「マジでどこに行つたんだよ……」

不審者に拉致られた可能性も否めなくもない。

それは、考えたくないな。

あれから一時間。

あらゆる所を探してみたが、やっぱりどこにもいなかった。

ゲーセンにもいなかった。

まあ、智花のことだから、一人ではいかないか。

本屋にもいなかった。

……最近、まとめ買いしてたからすぐにくることはないよな。

友達の家……は知らない。

たくさん友達がいるのは知っている。

てか、俺が智花の友達を知らないだけだが……。

「……休もう」

いったん、近くの公園に戻った俺。

ベンチに座って休もう……。

……ん？

そっぴや、ここって……。

ああ、俺と美代ねえと智花の三人で初めて遊んだ公園だ……。

懐かしいな……。

感慨深いな……。

……ベンチはどこだ？

再度、探しにかかった。

……いた。

思わず笑みがこぼれてきた。

ベンチだけではない。

……智花もいた。

そつと、バレないように後ろに回り込む。

一人沈んでいる智花の目を隠してみる。

お決まりの……。

「だーれだ？」

「……お兄ちゃん？」

「……ファイナルアンサー？」

「……」

ノってくれなかった。

兄は寂しい……。

「……ごめんなさい」

「まったく、探したんだぞ」

わしゃわしゃと智花の頭を撫でる。

「いきなり出て行くなんて、どうしたんだよ？」

ほんの数秒だけ、沈黙。

「私、恋さんに嫉妬したの」

「……」

……それは、つまり。

「もう分かっているとと思うけど、言うよ？」

俺はその言葉を受け入れなければならない。

「……ああ。言ってくれ」

智花は大きく深呼吸し、俺を見つめた。

「私、お兄ちゃんのこと大好きです」

「智花……」

俺は、その言葉に対して、どう答えればいいか分からない。

でも……。

何も言わないわけにはいかないよな……。

「ねえ、お兄ちゃん。答えて」

「俺は……」

（智花視点）

奇跡は、起きるかな……。

ずっと、そう願っていた。

……結果がどうなるかなんて、とっくに分かってる。

でも、願わずにはいられないよ……。

「俺は……」

早く、答えてほしい。

ほんの数秒で済むその言葉は、まだ出てこない。

「俺は、他に好きな人がいるんだ」

「それって、恋さん？」

「まあ、な」

……やっぱり、かなわないな、恋さんには。

「んじゃ、この話は終わり！ー！」

「切り替え早っ！……もういいのかよ？」

心配そうな顔つきのお兄ちゃん。

「まあ、ダメもどったからね」

「……ゴメン」

「謝らないでよ。……逆に辛いから」

「ゴメ……。いや、なんでもない」

やっぱり、辛いけど……。

お兄ちゃんが見てるのは私じゃないのが悔しいけど。

告白した分だけ、たまっていた何かがスッキリ流されていったみたいだ。

振られたのに、何だか気持ちがいい……。

「そのかわり」

「ん、何だよ？」

「私はまだ、お兄ちゃんのこと、諦めないからね」

……すごく恥ずかしかったけど、お兄ちゃんも恥ずかしそうにしてたけど。

「そうか……」

やっぱり恥ずかしいんだ。

「ありがとう、智花」

私の頭を撫でてくれたお兄ちゃん。

「帰ろうか」

「うん」

……私は、そんなお兄ちゃんが、大好きです。

〈秀明視点〉

公園から帰ってきた俺たち。

智花はすぐに部屋に戻ってしまった。

それと同時に恋が迎えに来てくれた。

「先輩」

「恋……」

ちよっぴり、涙で瞳が濡れている。

さっき、智花が飛び出していったのを、気にしていたんだな……。

「恋、さっきの告白だけだよ」

俺は、自分の気持ちを恋に伝えようと思った。

今まで、素直になれなかったけど、その分、今、ここで伝えなきゃいけないんだ。

「恋、お前が好きだ!!」

「先輩……」

恋が、泣いた。

いつも、元気で、笑顔で、優しくて、ちょっぴり淫乱な恋が、泣いた。

俺は、泣いている恋を見るのがイヤだった。

「……先輩？」

気づけば、俺は……。

「先輩、苦しいです」

「ああ、ゴメン」

俺は恋を抱きしめていた。

く美代視点く

「で、どうだった？」

あたしは、智花ちゃんに聞いてみた。

「……ふられちゃった」

「そう……。よく頑張った」

その可愛い頭を撫でてあげる。

涙を流している智花ちゃん。

……辛かったんだろうな。

「ん、恋ちゃん？」

ひょっこり、ドアから顔を出している恋ちゃん。

「あ、あの～。智花ちゃんは？」

「こっで泣いてるよ」

今もなお泣いている智花ちゃんに、恋ちゃんは話しかけた。

「……………ごめんなさい」

「謝らないで、ください。……………辛いです」

「……………分かったよ」

恋も辛そうに顔を伏せた。

「なーんてね」

智花ちゃん……………？

いきなり私から離れて恋に近づいた。

「智花ちゃん？」

恋ちゃんもびっくりしている。

「今回は、負けてしまいましたけど……。まだ、私は諦めませんから。……お兄ちゃんを取られないように頑張ってくださいね？」

さらに驚いた表情をする恋ちゃん。

……あたしも、びっくりだ。

「……はははっ。智花ちゃんったら可愛い〜」

恋ちゃんが智花ちゃんに抱きついた。

そこに。

「……あれ？ 二人とも仲直りしたのか？」

彼女たちの王子様、秀明くんの登場です。

すると、智花ちゃんったら……。

いきなり秀明くんに抱きついた。

「智花!？」

びっくり顔の秀明くん。

うん、あたしも、びっくり顔。

「と、智花ちゃん!？ 先輩はわたしに愛の告白をしたんですよ!？」

あ、したんだ。

気付かなかった……。

「でも、それだけじゃお兄ちゃんは振り向きませんよーだ」

「なっ、それって……!！」

「ちょっと待て!! 何のことだよ!!」

「お兄ちゃんは黙ってて!!」

「先輩は黙ってて!!」

「すみませんでした」

小さくなる秀明くん。

……実を言えば、ちょっとだけ、今の幸せな時間が別の何かに変わってしまうんじゃないかと思ってたけど、杞憂だったみたい。

だって、こんなにも明るいんだから。

「お兄ちゃん!! 結局、私と恋さんのどっちが好きなの!？」

「んなこと……!! 二人とも大事だし、二人とも大好きだよ!!」

「先輩のどっちつかず!! はっきりしてください!!」

「もちろん、お兄ちゃんが好きだよね!!」

「いや、わたしのほうですよね!？」

「あー!! 二人とも引つ張るな!!」

とりあえず、清川家（＋一名）は今日も明るいです。

清川家の日常……（前書き）

とりあえず、最終話です。

清川家の日常、第二期。

意外と短かった……。

清川家の日常……

〔智花視点〕

「……！！ 夢、か……」

嫌な夢を見たな……。

寒気が止まらない。

夢だから、そんなことが現実で起こるなんて、あり得ない。

あり得ないけど……。

やっぱり、心配だから、お兄ちゃんの部屋に向かってみた。

「お兄ちゃん……？」

…… やっぱり、いるよね。

ほっ、と一息。

戻ろっ……かな。

きびすを返し、自分の部屋に戻ろうと思った。

「……………」

まだ、今は深夜の二時。

また、あの夢を見てしまったら、平気でいられる気がしない。

「ちょっとだけなら、いいよね……………」

お兄ちゃんを起こさないように、こっそり近づく。

「お邪魔しまーす」

お兄ちゃんが入ってる布団の中に、私も入る。

…………… 温かい。

軽く、抱きついてみる。

…………… 何だか、安心する。

そのまま、私は眠りについた。

〈美代視点〉

「……………うわぁ」

なんか、イヤな夢を見たような……………。

涙が頬を伝って落ちた。

それをあたしはゴシゴシとふき取る。

時計はまだ、二時ほどを指している。

「……………寝よ」

……………。

……………。

……………うん。

……………はぁ。

眠れない。

あんな夢を見ちゃったからだな……………。

「ま、またにはいいか……………な」

こっそりと、秀明くんの部屋に向かった。

「……………智花ちゃん？」

先客がいた。

……眠っているけど。

「……眠っているところ、ちょっと失礼します」

あたしは、秀明くんの布団の中に入り込んだ。

……オヤスミ。

（秀明視点）

「ん、朝か……」

カーテンの隙間から差し込み光がまぶしい。

「……え」

なんか……。

えーと、これ、何てエロゲ？

なんか、智花と美代ねえが俺に抱きついてスヤスヤと眠っています。

妹と姉が……、俺に……、抱きついて……、……。

うん、これ、何てエロゲ？（大事なことなので二回言いました）

「二人とも、起きろよ」

「……」

「……」

返事がない。

ただのしかばねの……。

「……ん、秀明くん？」

しかばねではなかった。

「……どうしたんだよ、いったい」

「イヤな夢を見てね……。怖くなった」

「そんな美代ねえが怖く感じる俺は……あべしー!!」

「……智花ちゃん。起きなよ」

ああ、我が姉は俺を半殺しにしながら、妹を起こしましたよ……。

「……お姉ちゃん？」

俺を見つめる智花。

「……よかった。ちゃんといた」

「お前も、嫌な夢でも見たのか？」

「まあ、ね」

うつむく智花。

「……そんなことより、二人とも」

「何？」

「どうかした？」

「いい加減離れてくれない？ 苦しいです」

「「あつ……」」

そそくさと離れていった二人。

俺は布団から抜けだし、キッチンに向かった。

「……ほら、ご飯作るから。いつまでも寝てないで手伝ってよ」

「……うん」

「……着替えてくるから、待ってて」

元気のない智花に美代ねえ。

ま、後でその嫌な夢とやらを聞いてあげようかな……。

「「「いただきます」」」

今日は、二人の好きな朝ご飯のメニューにした。

まあ、これで元気がでればいいけどさ。

「ところで、嫌な夢ってどんな夢だった？」

すると、智花が答えた。

「……お兄ちゃんが、トイレに流される夢を見た」

「なにその夢!？」

……なんか心配して損した気がする。

「……で、美代ねえは？」

「あたしは、秀明くんがクジラに飲まれて二度と帰ってこない夢を見た」

「なにそのファンタジックな夢!？」

……なんか心配して以下略。

「……まあ、うん。俺はどこにも行かないから安心しろ」

「本当に？」

潤んだ目で俺を見るな、我が妹よ……。

「嘘付いたら蹴るよ？」

なんかファイティングポーズをとっている我が姉。

「……まったく、今日だけだぞ？」

買い物とかゴミ捨てとか色々やらなくちゃいけないことがいっぱいあるけど。

今日の二人を見てみると、なんだか、それよりも二人にかまっている方がいいような気がしてきた。

「……で、なんで引っ付いてくるのかな？ お二人さん」

「別にいいでしょ、お兄ちゃん」

「ま、たまにはね。いいでしょ？ 秀明くん」

「……はいはい」

ま、彼女たちの気がそれで済むならそれでいいかな。

そう思った日曜日であった。

今日も、清川家は、平穏です。

清川家の日常……（後書き）

楽しんで頂けましたか？

思ったより多くの人に呼んでいただき、幸せいっぱいのplane
tでございます。

清川家の日常はここでおわりです。

なぜなら、作者は勉強しなきゃなんのです！！

そろそろ、受験が……っ！！

……でも、もしかしたら。

また、書き始めるかも知れないので、また、そのときに会えること
を願います。

ここまで付き合ってくださいっただあなた達に最高の感謝を込めて……。

I l o v e y o u .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1674/>

清川家の日常

2010年11月14日08時17分発行